

社 会 科 教 室

第 147 号

平成 17 年度

香川県小学校教育研究会社会科部会

香川県小学校社会科教育研究会



基礎・基本の確実な「定着」とその「発展」を図る社会科学学習の展開

～「社会科ノート」と「社会科の基礎」を活用して学習の日常化を図ることから～

昨年度は、学習指導要領の一部が改訂され、平成 17 年度から使用されている教科書には、学習指導要領の範囲を超える「発展的な内容」が掲載される等、教育の分野でも様々な改革が行われました。それらは早急に取り組まなければならない学校の重要課題になっております。このような状況の中で、香社研の会員の先生方は、各学校でそれぞれの課題解決にあたりながらも、社会科教育の充実に向けて熱心に実践研究に取り組まれ、多くの成果をあげられました。

各郡市持ち回りでの定例研修会はもちろんのこと、小豆島で開催された夏季研修会やさぬき市立長尾小学校での研究発表大会は、郡市あるいは学校の総力を結集した実のあるものとなりました。特に、昨年度の研究の主眼であった社会科学学習における「地理的内容」の学習の研究を一層深めることができました。さらに、学習開発委員会の先生方の御努力により、現場の社会科学学習の役にたつことを第一に「社会科 2 学期単元事例集」が作成され、県内各小学校に配布されました。また、社会科学学習の日常化につなげる意味で、最も現場に直結する「社会科の基礎・テスト」についても、あらゆる角度から十分に見直しが図られました。

今年度は、昨年度の研究を踏まえ、その成果と課題を明らかにしつつ、新たな課題を加味して、次の四つの重点課題を設定しております。

- ① 学校教育の大きなねらいである「生きる力」の育成に向けて、具体的な要素（「人間力」「社会力」）が必要とされている。この「人間力」と「社会力」を身につけるための学習指導の工夫・改善、教材化・学習材化の工夫等でどのように研究を進めたらよいか。
- ② 社会科学学習の日常化をより一層進める観点から「社会科ノート」「社会科の基礎」の活用をどのように図ればよいか。
- ③ 社会科学学習の日常化とは別に、社会科教師の専門性を生かした単元構成や指導法等の工夫により、基礎・基本の徹底と発展の学習をどう求めればよいか。
- ④ 社会科の内容構成である「歴史的内容」について学ぶ際に、幼・小・中の歴史認識の系統・発展という観点から小学校社会科では何を大切にしなければならないのか。

会員の先生一人ひとりが、課題を十分に認識し、それぞれの学校での授業実践を通して研究し、それを各都市での定例研修会で交流することでさらに高まり、また深まっていくことを期待しています。今年度は木田郡・香川郡で夏季研修会が開催されます。両郡市の総力をあげての研修会は、きっと実りの多い実践交流になることでしょう。

「平成の大合併」が進行しています。県内でも市町の枠組みが大幅に再編され、郡がなくなったり、小さくなったりして郡としての機能を果たすことができなくなります。今後研修のあり方そのものを再考する必要にせまっております。

今年度も会員皆様方の熱意あふれる実践により、社会科教育が一層充実することを御期待申し上げ御挨拶といたします。

香川県小学校教育研究会社会科部会
香川県小学校社会科教育研究会
会 長 山 崎 敏 和

平成16年度事業報告

1 定例研究集会

- 6月定例会 (木田・香川)
 - ・ 月 日 6月26日
 - ・ 場 所 塩江町立塩江小学校
 - ・ テーマ 社会科の基礎・基本をふまえ、子どもが主体的に創る社会科学習
 - ・ 提案者 喜岡 永光 (香・塩江小)
6年「武士の世の中」
小笠原 学 (木・白山小)
5年「米づくりのさかんな庄内平野」
 - ・ 司会者 田岡 直樹 (香・川東小)
 - ・ 記録者 岡 佳代 (香・香南小)
 - ・ 指導者 陶山 真司 教頭先生 (木・小蓑小)
- 7月定例会 (三豊)
 - ・ 月 日 7月3日
 - ・ 場 所 財田町中央公民館
 - ・ テーマ 個が育ち、生きる社会科学習の創造
～考える力をつけるための学習をめざして～
 - ・ 提案者 石井 英樹 (観・豊田小)
深川 隆 (観・観音寺南小)
6年「源頼朝と武士の世の中」～室町文化にチャレンジ～
 - ・ 司会者 萬亀 弘吉 (観・観音寺東小)
 - ・ 指導者 臼杵 優 先生
- 9月定例会 (坂出・綾歌)
 - ・ 月 日 9月25日
 - ・ 場 所 国分寺町立国分寺南部公民館
 - ・ テーマ 子ども一人一人に学ぶ力・生きる力を育てる社会科学習
～基礎・基本をとらえ、問題解決学習のあり方をさぐる～
 - ・ 提案者 早瀬 良子 (綾・国分寺南部小)
3年「市(町)のようす」
須田美佐子 (綾・国分寺南部小)
5年「これからの食料生産」
大高 浩一 (綾・国分寺南部小)
6年「徳川家光と江戸幕府」
 - ・ 司会者 高吉 直之 (綾・国分寺北部小)
 - ・ 指導者 川中 祥照 教頭先生 (高・二番丁小)
- 11月定例会 (高松)
 - ・ 月 日 11月27日
 - ・ 場 所 高松市立二番丁小学校
 - ・ テーマ 「社会科」基礎・基本の定着と発展を図る
～日々の授業実践の充実を目指して～
 - ・ 実践者 池田 茂樹 (高・弦打小)
6年「日本と関係の深い国々について調べよう」
 - ・ 提案者 市原 茂幹 (高・亀阜小)
 - ・ 司会者 稲田 耕一 (高・仏生山小)
 - ・ 記録者 白川 由美 (高・木太南小)
 - ・ 指導者 池田 孝徳 教頭先生 (高・太田小)

○ 1 月定例会 (丸亀・仲善)

- ・ 月 日 1 月 22 日
- ・ 場 所 満濃町かりん会館
- ・ 実践者 山内 秀則 (仲・榎井小)
6 年「田中正造と世界に歩み出した日本」
増井 泰弘 (丸・城辰小)
6 年「源頼朝と武士の世の中」
- ・ 提案者 川田 真司 (仲・仲南東小)
山野 正登 (丸・城南小)
- ・ 司会者 森井 信一 (仲・四条小)
- ・ 記録者 四宮 美佐 (善・竜川小)
- ・ 指導者 片井 功 先生

2 夏季研修会

- ・ 月 日 7 月 29 日
- ・ 場 所 土庄町中央公民館, 土庄町総合福祉会館
- ・ 内 容 研究主題提案, 分科会, パネル・ディスカッション
- ・ 提案者 香川 英樹 (小・湊崎小)
3 年「学校の周り～ふちざきタウンサファリ～」
瀬名 宏樹 (小・安田小)
4 年「水はどこから」
藤原佐代美 (小・四海小)
5 年「わたしたちの生活と自然保護」
港 貴康 (小・池田小)
6 年「源頼朝と武士の世の中」
- ・ パネル・ディスカッション
パネラー 池田 孝徳 (高・太田小), 柴田 英明 (観・観音寺南小)
川井 慶太 (小・土庄小), 寺嶋 俊秀 (附高小), 佐柳 仁 (附坂小)
コーディネーター 岡本 英孝 (附高小)
総 括 池内 博 先生
- ・ 指導・講評 香川県教育委員会事務局義務教育課 主任指導主事 上井 嘉 先生

3 香小研大会

- ・ 月 日 11 月 12 日
- ・ 場 所 さぬき市立長尾小学校
- ・ 内 容 公開授業, 分科会, 研究主題提案, 講演
- ・ 授業者 永峰 弓 (長尾小), 大西 直子 (長尾小),
山田恵美子 (長尾小), 谷澤 和子 (長尾幼)
1 年「ドキドキ わくわく あきとなかよし」
木村 恵子 (長尾小)
2 年「大すき! 長尾の町」
石原 勝 (長尾小)
3 年「ミニトマトの栽培」
小泉 陽子 (長尾小)
4 年「今にのこる昔とくらしのうつりかわり」
長田 在代 (長尾小)
5 年「身近な工場から探る日本の工業」
沖 肅二 (長尾小)
6 年「世界の中の日本～日本と関係の深い国々～」
- ・ 講 演 文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 安野 功 先生

平成17年度 本部役員組織

本部役員

	氏 名	学 校 名	〒 学校所在地	学校電話
会 長	山崎 敏和	綾・国分寺北部小	769-0101 綾歌郡国分寺町新居1880	087-874-1154
副会長	植松 勝	高・松島小	760-0068 高松市松島町二丁目14-5	087-861-4503
	藤原 政志	木・平井小	761-0702 木田郡三木町大字平木710-1	087-898-0713
	西谷 則一	三・財田上小	769-0401 三豊郡財田町財田上726	0875-67-2005
幹 事	西 康比古	香・直島小	761-3110 香川郡直島町1600	087-892-3007
	松下 繁美	丸・富熊小	761-2407 丸亀市綾歌町富熊1227	0877-86-2010
会 計	山下 清明	仲・豊原小	764-0026 仲多度郡多度津町南鴨704	0877-32-2050
監 査	八木 育夫	さ・長尾小	769-2301 さぬき市長尾東901-1	0879-52-3181

顧 問

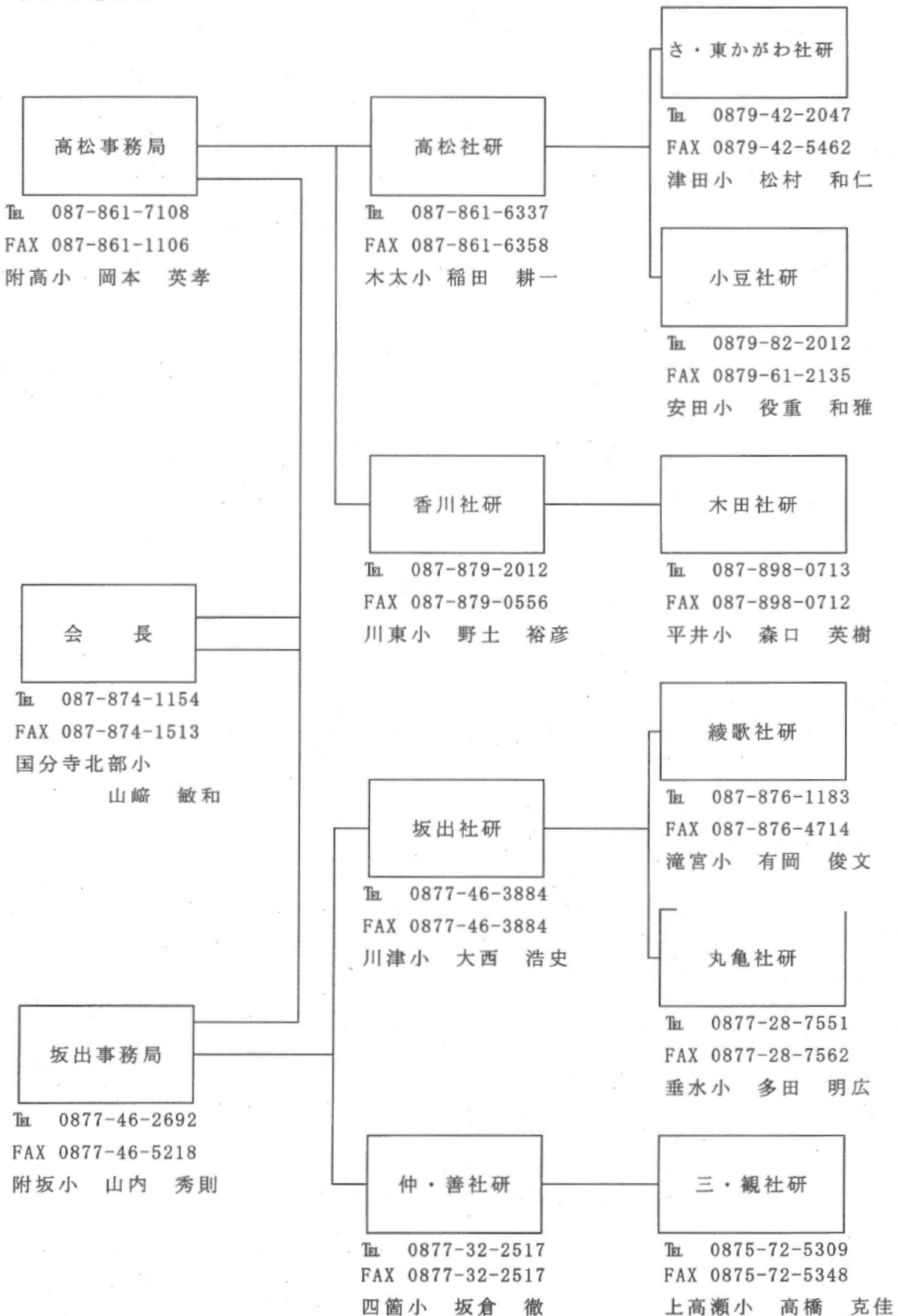
(歴代会長)	岩倉 良行	糸川 達	東原 岩男	柳 清茂
	池内 博	岡野 啓	亀山 信夫	川田 豊弘
	亀井 達男	岡田 弘治	曾根 照正	中田 清
	上川 敦生	丸野 忠義	古市 聖治	大西 孝典

常任指導者	池内 博	岡田 弘治	曾根 照正	丸野 忠義
	古市 聖治	大西 孝典		

事務局	旅田 敏弘	合田 雅気	佐柳 仁
	岡本 英孝	寺嶋 俊秀	亀井 健男
	山内 秀則	小西 寛	

平成17年度連絡網

香社研連絡網



郡 市 理 事 名 簿

郵便番号	郡 市	町 名	校 名	○	理 事 名	勤 電 話
760-0068	高 松 市	松 島 町	松 島 小		植 松 勝	087-861-4503
761-8071	"	伏 石 町	太 田 小		池 田 孝 徳	087-865-4433
760-0080	"	木 太 町	木 太 小	○	稲 田 耕 一	087-861-6337
761-2407	丸 亀 市	綾 歌 町	富 熊 小		松 下 繁 美	0877-86-2010
763-0095	"	垂 水 町	垂 水 小	○	多 田 明 広	0877-28-7551
762-0012	坂 出 市	林 田 町	林 田 小		野 村 一 夫	0877-47-0270
762-0025	"	川 津 町	川 津 小	○	大 西 浩 史	0877-46-3884
761-4131	小 豆 郡	土 庄 町	四 海 小		佐 藤 正 文	0879-64-5051
761-4411	"	内 海 町	安 田 小	○	役 重 和 雅	0879-82-2012
769-2301	さ ぬ き 市		長 尾 小		八 木 育 夫	0879-52-3181
769-2903	東かがわ市		相 生 小		三 井 重 彰	0879-33-3627
761-0901	さ ぬ き 市	大 川 町	富 田 小		廣 瀬 強	0879-43-2016
769-2401	"	津 田 町	津 田 小	○	松 村 和 仁	0879-42-2047
761-0702	木 田 郡	三 木 町	平 井 小		藤 原 政 志	087-898-0713
761-0615	"	"	小 蓑 小		陶 山 真 司	087-899-1023
761-0702	"	"	平 井 小	○	森 口 英 樹	087-898-0713
761-3110	香 川 郡	直 島 町	直 島 小		西 康 比 古	087-892-3007
761-1701	"	香 川 町	大 野 小		藤 本 郎	087-885-2165
761-1706	"	香 川 町	川 東 小	○	野 土 裕 彦	087-879-2012
769-0101	綾 歌 郡	国分寺町	国分寺北部小		山 崎 敏 和	087-874-1154
761-2305	"	綾 南 町	滝 宮 小	○	有 岡 俊 文	087-876-1183
764-0026	仲 多 度 郡	多度津町	豊 原 小		山 下 清 明	0877-32-2050
764-0032	"	"	四 箇 小	○	坂 倉 徹	0877-32-2517
765-0013	善 通 寺 市	文 京 町	中 央 小		森 昭 二	0877-62-1616
769-0401	三 豊 郡	財 田 町	財 田 上 小		西 谷 則 一	0875-67-2005
767-0011	"	高 瀬 町	勝 間 小		前 田 高 次	0875-72-5329
767-0001	"	高 瀬 町	上 高 瀬 小	○	高 橋 克 佳	0875-72-5309
768-0060	観 音 寺 市	観 音 寺 町	観 音 寺 東 小		萬 亀 弘 吉	0875-25-2219

平成17年度 年間研修計画

研修会の詳しい日程等につきましては、事前に連絡網を使ってご連絡します。

月	理事会 総会等	内容研修		学習指導法 研修	研修会・研究大会		社会科情報 発信	教育課題 研修
		事務局等研修会	社会科の基礎 編集委員会	学習開発 委員会	定例研修会 研究委員会	夏季研修会 (木田・香川)		
4	27(水) 事務局会					9日(土) 事前研修会		
5	7(土) 理事会 総会 歓送迎会 (銀星旅館) (高松)	7(土) 第1回事務局等研修会 今年度の研究について (銀星旅館)	7(土) 平成17年度2学期 テスト検討 (銀星旅館)				社会科教室 第147号 (総会特集)	
6		4(土) 9:00～ 第2回事務局等研修会 (夏季研提案者とともに) 夏季研に向けて (附属高松小)		4(土)9:00～ 第1回研修会 (附高小)	18(土) 丸・仲 (坂出)		香社研だより 6月号 (事務局)	25(土)
7					9(土) 小・さ東 (高松) ※終了後夏 季研事前打 ち合わせ会	18(月) 製本・発送 27(水) 会場準備 28(木) 夏季研修会	香社研だより 7月号 (丸・仲)	2(土) 9(土)
8							香社研だより 8月号 (小・さ東)	9(火) 10(水) 19(金) 20(土) 22(月) 23(火) 24(水) 25(木) 26(金)
9				() 第2回研修会 (附高小)	17(土) 三・観 (坂出)		香社研だより 9月号 夏季研の成果 と課題 (木・香)	
10			22(土) 平成18年度1学期 社会科基礎編集会 (第1回) (附高小)	() 第3回研修会 (附高小)			香社研だより 10月号 (三・観)	
11			12(土) 平成18年度1学期 社会科基礎編集会 (第2回) (附高小)	() 第4回研修会 (附高小)	26(土) 坂出・綾歌 (坂出)			
12	3(土) 理事会 年末反省会 (銀星旅館) (高松)	3(土) 第3回事務局等研修会 今年度の成果と 課題 (銀星旅館)	3(土) 平成18年度1学期 社会科基礎編集会 (第3回) (銀星旅館)				香社研だより 12月号 (坂・綾)	27(火) 28(水)
1					21(土) 高松 (高松)		香社研だより 1月号 (事務局)	
2		18(土) 第4回事務局等研修会 次年度への研究方針に ついて (ブルースカイ坂出)		() 第5回研修会 (附高小)	18(土) 研究委員会 (ブルース カイ坂出) (坂出)		香社研だより 2月号 (高松)	
3	25(土) 事務局会 (附高小) (高松)						香社研だより 3月号 研究委員会 報告 (事務局)	25(土)

研究主題

基礎・基本の確実な「定着」とその「発展」を図る社会科学習の展開
～「社会科ノート」と「社会科の基礎」を活用して学習の日常化を図ることから～

I 研究主題について

平成17年度は、研究主題「基礎・基本の確実な定着とその発展を図る社会科学習の展開～「社会科ノート」と「社会科の基礎」を活用して学習の日常化を図ることから～」を設定することにより、新しい時代に対応した学校を創っていくことを目指したい。

今年度は、香小研夏季研修会が木田・香川支部で予定されている。また、平成20年度には、小学校及び中学校による四国大会の開催が予定されている。

これらの大会に向けて県内各郡市の研究と実践を積み重ね、各学校における社会科授業の充実を図るためだけでなく、特色ある学校運営にも寄与できる研究体制を整えていきたい。

II 課題

今、中央教育審議会等において、社会科を巡る論議が活発になっている。その論議の中心として、以下に述べるような学校教育、社会科そのものの持つ性格やその目的、カリキュラム、授業方法にかかわる様々な点から問題が提起されている。

まず、それらを整理し、また昨年度の研究を振り返ってみることによって、今後の社会科の授業改善の視点としたい。

1 目的論

我が国を取り巻く国際情勢の変化、我が国の経済・社会構造の変化の中で、一人一人の人間が、この変化に適切に対応し、社会において確固たる生活の基盤を得て十分な自己実現を果たすためには、それぞれのもてる能力を高め、その能力を最大限に発揮できるようにするための教育が必要になっている。このような観点からの学校教育の改革が求められている。

また、国際調査等から明らかになったように、我が国の子供たちの学習意欲の低下、若年層のコミュニティや社会に対する参加意欲の低下等の問題の顕在化への対応策が急務となっている。

さらには、我が国の歴史や文化、国土のことを十分に説明できない、世界の国名と位置が分からない大人が増えていること等に対して、将来地球市民として生きる子供たちに小学校段階から我が国や世界の国土と歴史についての正しい理解をどう育てていくのかという問題が提起されている。

2 カリキュラム論

地域運営学校等が提唱されているが、家庭教育、地域との関係の中で今後どのように社会科学習が展開されるべきなのか。また小・中・高を通じて子供たちが社会科で何を学んでいくのか。

さらには、キャリア教育、生涯学習との関連を視野に入れた社会科学習の改善が図られなければならない。「国民共通に求められる力」と「専門分野で活躍する人材にとって必要な力」を整理して、すべての子どもたちにどのように身に付けられるようにするのかという問題もある。

3 教材論

社会事象が刻々と変化する中で、具体的に社会の変化に対応した内容をどう取り上げればよいか。何が不易で、何が流行であるのかを吟味することが大切である。また、国際化というと政治や経済の面からのみとらえがちであるが、現在地域レベルで世界化が進んでいることを考慮した学習が求められる。

4 学習指導論(日常化に向けて)

社会科教育は、これまで他教科に先んじて確かな教材論、授業方法論、子供論によって先進的に研究を進めてきた経緯がある。まさに国民一人一人に主権者意識を育て、平和と民主主義を愛する人間を育ててきた教科であるという責任と自負をもっている。

しかし、今教育現場では、学力低下への批判に応える形で、少人数指導、習熟度といった学習方法論ばかりが主となり、しかも国語、算数という教科に偏った実践が多くなっている。

本来、教育は、豊かな人間形成という視点を抜きにしては語れないものであるにもかかわらず、こうした偏りがみられている今だからこそ、時代の流行に流されることなく社会科教育の原点を見つめ直し、社会科の存在意義を再確認することが大切である。

また、研究授業と日常的な社会科授業の格差が広がり、社会科を専門とする教師とそうでない教師の学習指導の格差が大きくなっていること等の現状を踏まえ、学びの過程を子供自らが自覚し、教師自身も指導と評価の一体化をより一層進めることができるようにするためにも「社会科ノートの充実・活用」ということ、学習と評価の一体化を進める観点から「社会科の基礎の活用」について、より実践的な研究を進めていきたい。

Ⅲ 昨年度の研究成果

まず、今年度の研究内容について述べる前に、昨年度の研究成果である「地理的学習」の側面からの研究内容について、振り返ることとする。

昨年度、社会科学学習における「地理的内容」の学習、すなわち「地理的学習」の研究を進めようと意図した理由をいくつか項目を挙げて説明しておく。

- ① 社会科学学習における基礎・基本の徹底が問われている中で、「地理的内容」の基礎・基本を明らかにするとともに、地理的なものの見方・考え方を育てること。
- ② 「個に応じる指導」という一般論としての学習指導法は、社会科学学習においても研究されている。しかし、「地理的学習」において、地理的内容の認識の学習における地図指導、統計資料の活用をともなった学習は十分とはいえないこと。
- ③ 社会科学学習における「地理的認識」の幼・小・中の接続は、今まで十分には考えられていなかったこと。

1 社会科における地理を学ぶ意義

私たちは、地理を学ぶことによって、人間がどのように自然事象とかかわり、社会生活を行っているかを知ることができる。というのは、現実の社会は、家族集団から住む地域、そして日本、世界と広がり、私たちの生活は、常に身近な地域、日本の国土と、そして世界などとからみあった多様な社会事象の中で、常に空間的な広がりと時間的な広がり与人間的なつながりを持ち、その3者が交差するところに存在するものだからである。

従って、社会について正しい理解と豊かなイメージをもつためには、その空間的な軸と時間的な軸と人間的な軸からの追究が必要なのである。

地理的学習では、その社会事象を特に空間的な軸から考察する学習である。人間と環境(自然・社会)との関係を衣・食・住や産業、交通、集落等についてみていくものである。だからこそ、どんな地理的事象の背景にも、自然と社会の二つの要因があることを前提としておくことが必要である。

そこで、地理的学習を学ぶ意義をまとめてみると、次の3点が考えられる。

- ① 現実の社会生活は空間的な広がりを持ち自然や社会との関連をもちながら展開している。人間は、土地的存在であり、場所的存在であり、空間的存在であるともいえる。
- ② 社会科の目標には、国土に対する理解と愛情を育てるとある。国土を理解し、国土と国民生活との深い関係を理解してこそ国土への愛情が育つものである。国土に展開している社会は、各地各地によって特色があり、それらを理解することは、自らの地域・社会を一層よりよく理解するもとなり、よりよい生き方につながっていくもとなる。

- ③ 人間・社会は地表のどこかに位置を占めて存在しているとともに、他地域との結びつきによって存在し得る。

以上の通り、地理的学習は、空間的な広がりとしての人間生活と自然・社会環境との関係、及びその調和を図っていくために必要な学習であり、それによって、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養うことができることが期待される。

2 地理的認識

(1) 系統地理と地誌

地理的認識には2つの立場がある。いわゆる系統的地理と地誌的地理である。

系統的地理とは、地表に生ずる地形・気候・経済・社会・文化などのある事象を一つまたはいくつかを取り上げ、その分布や背景等について分析的に追究していく地理的学習である。

一方、地誌とは、ある特定地域を取り上げ、その地域を構成する多くの地理的事象を総合的に追究する地理的学習である。地域には、それぞれ固有の地域的景観をもっていて、その背後には、地域を地域たらしめている要因がある。その要因を追究するものである。地誌では分析よりも総合に重点を置き、一般的な法則性よりも地域の特殊性に重点が置かれる。

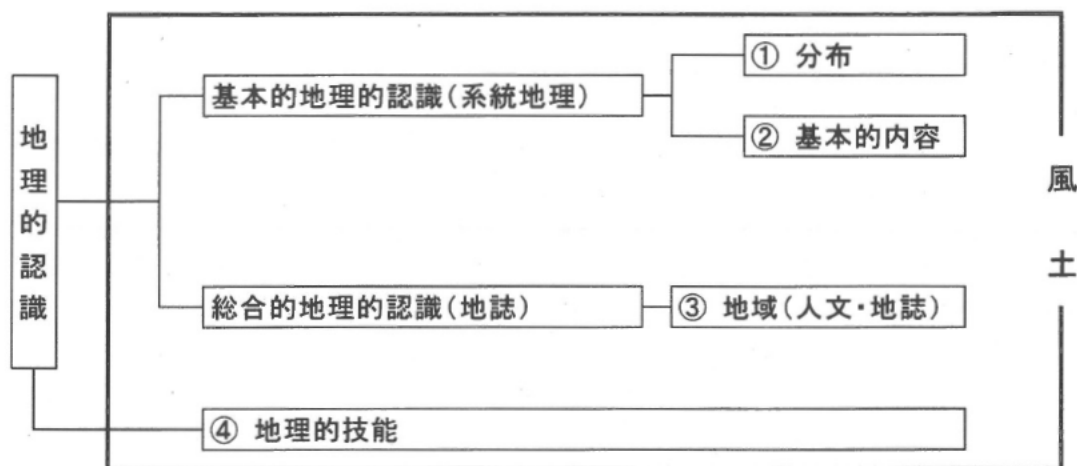
地域社会に関する地誌は、3年生の段階から行われていて、その中に地誌的な見方や考え方の芽がうかがえる。身近な地域の地誌で学習した見方・考え方を基礎として、地域を日本の各地に広げて地誌的学習を発展させ、さらにそこで得られた地理的知識や考え方をもとにして、日本から世界各地へと拡大するような学習方法をとっている。これは、学習者の体験や社会についての見方・考え方の拡大によって行われるものである。

つまり、小学校社会科では地誌が重視されているわけである。

しかし、今までの小学校社会科学習の空間認識は、身近な地域から郷土へ、そして日本の国土から世界へというように同心円の発達理論が主流となり、地誌的学習の内容もこの視点から扱うこととしてきた。これでは社会事象についての空間的な見方や考え方が、同心円的な枠を越えて育てられないのである。そこでどうしても、この地誌的学習の取り上げ方を「同心円的な考え方」から脱却することが大きな課題なのである。

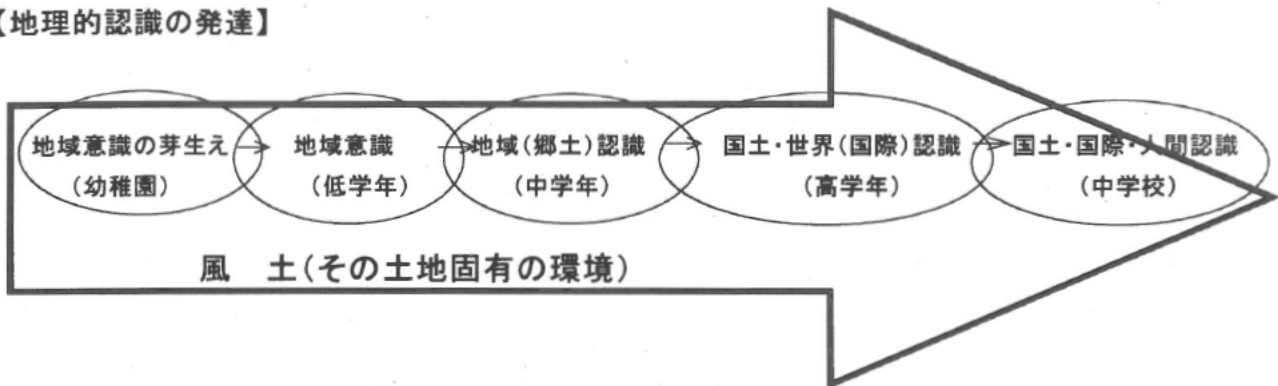
また一方、中学校では、まず系統的学習によって、世界を概観し、その見方・考え方を使得って日本や世界の諸地域の学習に展開されている。いわゆる系統的地理が重視され、地誌的学習はその後に学習されることになっている。

(2) 基本的内容



地理的認識は、幼稚園での「地域意識の芽生え」から小学校1・2年生での「地域意識」へ、そして3年生での「地域認識」、4年生での「郷土認識」へ、そして5年での「国土認識」、6年での「世界（国際）認識」へ、さらには中学校での「国土・国際・人間認識」へと深まっていく。

【地理的認識の発達】



こうした地理的認識の発達には、常に「風土(その土地固有の環境)」という軸を通してみるこ
とが大切である。※詳しくは「Ⅴ 歴史学習について」で述べる。

私たちを取り巻く地域や国土環境は、自然現象によって常にその姿を変えている。しかし、
そのような自然の営みだけが国土の景観を変えるものではない。人間の生きるための営みは、
絶えず自然への働きかけをしている。その働き(生産活動)は、科学技術発展が著しい昨今で
はその変化に要する時間も短くなっているが、その働きかけは人間が生きている太古からある。

人間の歴史のどの過程においても、その中で生きてきた自然には、何らかの意味で人間の働
きかけがあったはずである。こうした点からいっても、正しい地域・国土認識の形成を図るた
めには、自然現象とともに人間の環境への働きかけについて空間的な側面、時間的な側面、そ
して人間の生産活動という人間的な側面からの分析が必要になってくるのである。

つまり、地理的な学習の基本内容としては、人間と自然とのかかわりからみた自然環境から
だけでなく、集落、交通などの社会環境も含めた地理的環境としてとらえることが大切なこ
とである。

その主な地域意識の発達としては、土地により分布の相違がみられるのはなぜだろうという意識
となって現れ、それを風土との関連において考える意識へと発達する。

中学年で直接経験を通して具体的に養われた環境との関連についての見方を高学年での間接経験
の学習にも生かし、さらに深めていくように発展を図るべきである。

地域意識の芽生え、地域意識の段階においては、分布の原因を社会的条件と自然的条件の両面から
見る。つまり、自然条件では、地形や気候の観点からみることができるようになることであ
り、社会的条件としては、経済的(衣・食・住、産業の役割、資源活用等)と社会的・政治的条件
(技術の向上、経済組織等)という面がある。

そして、地域認識の段階では、一定の広がりをもつ地域固有の特色(風土)を自然や社会の諸条
件から認識する。ただ、地域性の総合的理解は、分布及び関連が十分に発達してでなければ難しい
と思われる。

そして、こうした地域認識が基底となって、我が国の国土意識・国際意識の学習へとつながって
くる。では、ここで学年の系統について考察する。

<低学年>

低学年生活科では、季節の変化と生活との関連に気付くことができるようにし、3年生では、自
分の住んでいるまちの人々の生活と自然との関連について発展するが、自然を地形、気候、資源、
交通といった分析的にみていく点に特色がある。

<中学年>

3年生での土地利用や住宅地や工場の多いところ等についての考察では、単に自然条件だけでな
く、交通条件、周りの住宅地との関連が考えられるため、社会環境との関連も含めることは大切な
点である。

4年では、県の特色を考える際に、県内各地の人々の生活と自然・社会環境との関連についての
思考を深めていく。ここでは、単に自然と人々の生活との関連の面だけでなく、自然の利用・保護
・資源の活用など自然と生活との関連の内容を深め、広げていくわけである。

＜高学年＞

5年では、日本の農業、工業、通信等の各種産業の学習や貿易・運輸の学習において、日本の自然環境の特色と産業全体との関連、各種産業における生産と環境との関連について考えられるようにする。また、日本各地の地形や気候の違いによる人々の生活の違いについての学習により、4年で培った見方・考え方をより広げてとらえられるようにする。

6年では、主な国々の特色の理解には、自然環境との関連すらの考察も含まれる。日本と関係の深い国々の学習では、日本の生活や産業、及びそれらの発展などと自然環境との関連を世界の国々のそれと比較して、関係的に扱うことができる。

(3) 地理的技能の習得

もう一つには、地理的技能の習得がある。地理学習で培われる技能としては、野外を実際に歩きながら地理的事象を見抜く技能やそれを地図に表現して分布の偏りや集中を考える技能、地図や統計資料などを目的に応じて作成する技能、様々な情報メディアから適切に調べることができる技能などがある。これまではこうした技能の育成が十分に意識されて指導されてきたとはいえない。また、生活の中での地図・地理情報が増大している現在、現代社会に生きる人間形成という視点からも地理的技能を重視する必要がある。さらに、これまでは、3年生社会科で絵地図から平面地図への指導が行われ、地域理解の表現方法としている。しかし、それ以前の生活科等による絵地図に至るまでの地図指導の在り方であるとか、6年生で学ぶことになっていた分布図等について中学校で指導するようになり、基礎的な地図や統計資料の読み取りの仕方であるとか、描図の仕方といった技能については、先送りされてきた経緯がある。しかし、それでは、小学校で必要な資料の読み取りが充分には理解できないという問題も起きている。

3 事実認識を確かなものにする地理的学習

小学校中学年においては、見学後に「商店で働く人はどんな工夫や努力をしていましたか」という問いを安易にしていまいがちである。しかし、「調べたことを地図に表してみよう」「品物は店内にどのように並べていますか。平面図を描いてみましょう。」「品物はどんな経路で店や私たちの家に届きますか。」といった空間についての事実認識の学習を丁寧に指導することによって、商店の工夫や働き等、社会的意味の理解の定着が図られるのである。

また国際理解の学習で、ある国の文化面だけを具体的にに取り上げて、日本と比較し、その国の生活の様子を理解するのではなく、やはりその国の地形や気候、産業、文化、日本とその国の位置を確認させる等の指導をすることが、真の国際理解につながる。このように、どの単元においても、地理的な内容を学ぶことは大切なことである。

4 地理的知識・理解を重視する地理的学習

これまでは、社会の仕組みや働きという内容を重視しすぎる傾向にあり、それが社会科指導に長けた教師しかうまく教えられないほど難しい教科となっているのではないだろうか。また子どもたちにとっても、現代の社会を理解する上での必要な知識やスキルが欠如したままで社会的な意味を考えるとという高度な学習になっているのではないだろうか。現実には地図が読めない、描けない、地名を知らないなどの子どもが増えている昨今、社会について「考える」ための基礎学力を改めて考え直すことが大切である。

以上、昨年度の研究内容についての概要について述べてきたが、詳しくは平成16年度香小研社会科部会研究発表会（長尾大会）において刊行された「平成16年度社会科・教育開発(地理編)」を参照されたい。

IV 今年度の研究の重点

では、ここで今年度の研究の重点についてまとめておくこととする。

- ① 学校教育の大きなねらいである「生きる力」の育成に向けて、具体的な要素（「人間力」「社会力」）が必要とされている。この「人間力」と「社会力」を身に付けるための学習指導の工夫・改善、教材化・学習材化の工夫等でどのように研究を進めればよいか。
- ② 社会科学習の日常化をより一層進める観点から「社会科ノート」「社会科の基礎」の活用をどのように図ればよいか。
- ③ 社会科の日常化とは別に、社会科教師の専門性を生かした単元構成や指導法等の工夫により、基礎・基本の徹底と発展の学習をどう求めればよいか。
- ④ 社会科の内容構成である「歴史的内容」について学ぶ際に、幼・小・中の歴史的認識の系統・発展という観点から小学校社会科では何を大切にしなければならないのか。

研究の重点①及び④については、定例研修会、夏季研修会等により研究部を中心に提案し、重点②及び③については、各郡市提案を中心に実践研究を進めていくこととする。

1 「生きる力」と「人間力」「社会力」の育成

(1) 「生きる力」と学校改革

教育は、次世代に向けての人材育成のプログラムである。人を人的な資源として構想するためには、将来の目標を定め、新しい能力を獲得できるための意欲を喚起しなければならない。

学力は、学習によって個人の能力として育ち、定着されるものであるが、同時に学力は次世代の人材育成の要素でもあることから、経済界、産業界からも強い関心をもたれており、それが教育界への様々な提言として打ち出されている。

将来の社会を担う子供たちにとって、社会の中で自立し、役割や責任を果たしながら自分らしい生き方を追求する人間の育成が、教育の究極の目標であるならば、子供たちを「結果としての学力」からのみでみるのではなく、かけがえのない個性を多面的に把握し、優れた資質や行動特性を伸ばし、不足している側面を育てようとする教育の在り方が強く求められているはずである。

「生きる力」は、こうした理念のもと、まさに全人教育、豊かな人間形成の核として、学校・家庭・地域の協働によって育てられるべきものとして提言されてきた。

「生きる力」の育成は、21世紀教育課題のキーワードであり、新しい学力観による授業改善を一層促進することとともに、特色ある学校づくりのための学校改革の要であるともいえる。

また「生きる力」は、社会に主体的に対応する資質や能力であり、21世紀社会を切り拓く社会の形成者としての全人格的な知・徳・体の育成を目指し、学校、地域、家庭が互いに連携・協働の視点から様々な課題に主体的に立ち向かう問題解決能力としての実践力を養い、あらゆる活動で自己の生き方を探求し、人間形成としての知恵を身に付けるものとしてとらえられている、まさに全人的な力であるともいえる。

しかし、今日の学力低下論争に象徴されるように、「生きる力」は、「知的側面」にあたる基礎的な知識・理解を重視するものであるという矮小化された論理のもと、知識・理解の習得のみを重視しようとする確かな学力づくりへと移行しつつある。

このことは、全人教育であるべき学習意欲の育成や地域住民に開かれた学校づくり、学校の地域社会化を図り、学校・家庭・地域が連携・協力した「生きる力」の育成という教育改革の流れに水を差すことにもつながっている。

分かることが、教科の学習内容を理解していくための手段としての学びになり、地域社会に生きる力としての学びの習得にまでは至っていない。そこに、受験のための知識・理解に力を入れた学力づくりへの回帰がみられるのである。

こうした教育論争を正しい道筋にもどす意味からも「人が社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きる力」を身に付けていく「人間力」とともに「人が人とつながり社会をつくる力」としての「社会力」を育てることを重視していきたい。

(2)「人間力」「社会力」の育成

「人間力」と「社会力」の育成は、これまでの学校教育が教科教育の知識・理解の習得を中心にした学力形成に重点をおいてきたことへの反省から提案されてきた。

そこに共通してみられることは、人間は社会的存在として地域社会の人々とふれあい、コミュニケーションの中で様々な文化を学んでいくことを重視していることである。

この「人間力」「社会力」という内容を導入することによって、従来までの社会科で学習すべき内容に付加し、21世紀の社会を担う人間づくりという点から、新しい観点を取り入れた内容研究にしていきたい。

①「人間力」の育成

一方、人間力とは、人間力戦略研究会報告書では「社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力」と定義されている。

その構成要素として挙げられているのは、

- 「基礎学力」「専門的な知識・ノウハウ」をもち、自らそれを継続的に高めていく力、また、それらの上に応用力として構築される「論理的思考力」「創造力」などの知的能力的要素
- 「コミュニケーションスキル」「リーダーシップ」「公共心」「規範意識」や「他者を尊重し切磋琢磨しながらお互いを高め合う力」などの社会・対人関係力的要素
- これらの要素を十分に発揮するための「意欲」「忍耐力」や「自分らしい生き方や成功を追求する力」などの自己制御的要素などが挙げられている。

また、人間力は、それを発揮する活動に着目すれば、

- 職業人としての活動にかかわる職業生活
- 社会参加する市民としての活動にかかわる市民生活
- 自らの知識・教養を高め、文化的活動にかかわる文化生活

という側面に分けられる。これらの要素は、まさに社会科で育てたい資質・能力でもあり、公民的資質の基礎であるといっても過言でない。

②「社会力」の育成

「社会力」とは、「人が人とながり社会をつくる力」であり、同時に「社会の運営に積極的にかかわろうとする態度や、よりよい社会を創ろうとする意欲を含み、さらにはよりよい社会を構想する能力や構想した社会の実現のための様々な資質や能力」とであると定義されている。

この社会力を育成するためには、「学校を地域に開く」ことが挙げられる。学校の教育活動で地域の課題を地域の人々とともに取り組み、協働する体験を通して、地域社会に対する関心や愛着、信頼感を高めることができる。また、地域課題への取り組みは、地域理解と地域への愛着を強め、さらには地域の活動や社会の運営にかかわる社会参加への意欲を高めることも期待できる。

2 「人間力」「社会力」を育てる学習指導過程の工夫

(1) 学力観・学習観

「ゆとり」の中で「生きる力」をはぐくむという学習指導要領の本来の趣旨が「子供の勉強を少しでも楽にしよう」という緩みや「時間的な余裕の中で反復や繰り返しのドリル学習等によって定着を図ろう」というように誤解されてとらえられているのではないだろうか。

ドリルによる習熟は、もちろん必要なことではあるが、ドリルの時間が教科の授業の大半を占めるようになっては教科指導は成り立たなくなる。このような誤った解釈のもとでは、子供たちの「生きる力」をはぐくむことにはつながらない考える。

また「ゆとり教育」への批判の流れの中で、学習指導方法の改善として他教科では少人数指導や習熟度別学習が注目され、それがあたかも基礎学力重視の象徴のようにになっているが、決してそうではないことに留意する必要もある。

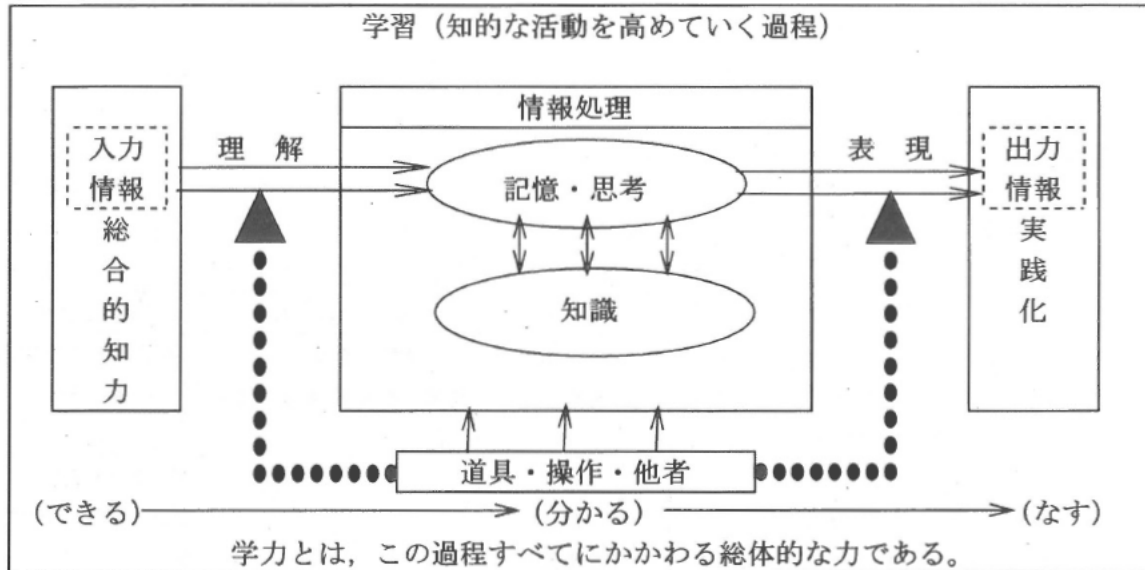
「確かな学力」は、知識や技能はもちろん、学ぶ意欲や思考力等までを含めたものであり、それを学習指導の中で「関心・意欲・態度」「技能・表現」「思考・判断」「知識・理解」という4観点から形成的に評価することが大切なことである。一斉画一的な指導や反復練習だけをしていては、

本当の意味での評価にはつながらないことは明白である。新しい教育課程が「ゆとりの中で生きる力をはぐくむ」という趣旨とそれを具体化するためのカリキュラムを打ち出しているのは、こうした現れと見ることができる。

これからの学校教育、とりわけ社会科授業を核に他教科・他領域を含めた学習指導の工夫・改善として、この学習指導要領のねらう本来の趣旨に立ち返り「自ら学び、考え深める社会科学習の日常化」という視点を大切にしたい研究を進めていきたい。

これから求められる学力観・学習観については、下記の図の通りである。

＜これからの学力観・学習観とは＞



入力（できる）	情報処理（分かる）	出力（なす）
単に社会科だけでなく、全教科・領域での体験をもとにした「総合的知力」を育成できるようにするための情報が不可欠である。この単元を貫く情報を明確にする。	情報は、既有知識を使って理解され、他の知識としっかり関連づけられることによって、記憶が確かになる。その際に、外的な情報源としての道具・操作・他者という存在が不可欠である。	思考は表現を通して顕在化する。表現力をつけることは、思考力を高めることにつながる。相手に分かりやすい表現（アサーション）の習熟が大切である。

(2) 「測りにくい学力」とは

最近の低学力論争に応じる形で行われている学力向上の課題について考察することとする。現在、多くの学校で行われている学力向上のための方法としては「反復・練習プリント」「少人数」「習熟度」という指導方法を組み合わせた学習指導の工夫・改善が行われている。しかし、このような指導法の工夫をすれば学力が高まるのかについて多少の疑問が残る。そこで、改めて学力とは何かに立ち返ることが大切ではないだろうか。

いわゆる学力には、「知識・理解（内容知）」と「学習力（方法知）」「人間知」があり、その中でも「測りやすい力」と「測りにくい力」があるのではないだろうか考えるのである。

「内容知」における「測りやすい力」とは、歴史的な事実とか分数の計算等、学んだ結果身に付知識や技能であり、これはペーパーテスト等で測りやすい。教科では、このような基礎・基本の事項の理解の上に立って、その教科の大系からの思考を可能にする。基礎・基本の事項が理解されていなければ、基礎・基本の内容の定着は図られないのは確かであるが、復習やドリル等の練習学習のみでは、決して考える力を伸ばせるとはいえない。

一方「測りにくい力」としては、その子ならではの「基礎・基本の内容」が挙げられる。これは、その子の学習過程での発言や表現物から、その子の思考の流れを読み取り確実に「定着」しているか

どうかを見取るわけであるから、テスト等では簡単には測れないものであろう。また「方法知（学習力）」については、まさに「測りやすい力」というものはないのは明らだろう。

学習力には、論述力、討論力、論理的思考力、問題を追究したり解決したりする力などがあるが、それ自体、数値化が難しいためである。まさにポートフォリオやグループエンカウンター、ポスターセッション等を体験していく過程で、教師の適切な指導のもとに身に付いていく力であらう。

今の学習指導では、測りやすい学力を数値化して、どの程度到達できたかを見取り、少人数指導等の指導法の工夫・改善により、学力の向上をめざすという一面的な取り組みが盛んに行われている。つまり「測りやすい学力」としての知識や技能の習熟度によって評価する傾向が強く打ち出されている。しかし、学力には上記のように「測りにくい学力」があり、そうした力をはぐくむことが「生きる力」を育てるためには必要なことである。

また、認知心理学からも、ものごとを記憶したり、応用したりするときには、反復・繰り返し練習ではなく、情報を構造化して取り入れることが決定的に重要であるともいわれている。その点からも、思考操作を大切に授業展開を考えたい。

これからの社会科授業では、自ら主体的に調べ、調べたことを効果的に表現し、表現と思考の連続によって社会的事象の本質について考え、深めていく力を育てていくことを大切に授業づくりが望まれている。だからこそ、単元構想の段階においては、教材と学習材をどのように開発すればよいのか。また、1単位時間の学習においては、思考操作によってどのように思考と表現の重層化を図っていくのかが、重要な鍵となるだろう。今年度の研究として「生きる力」を育てるためには、こうした「測りにくい学力」をどのように評価していくのか、またこうした力を身に付けるために思考操作の重層化、学習指導過程の工夫を

	測りやすい力	測りにくい力
知 識 (内容知)	漢字・計算等 基礎・基本の事項(社会 用語)	基礎・基本の内容 表 現
学 習 力 (方法知)		ポートフォリオ グループ・エンカウン ター ポスターセッション等

どうすればよいのかについて研究課題としたい。

(3) 「測りにくい学力」をどう評価するか

「測りにくい力」を見取るための手だてとしては、子供の表現から見取る方法がある。前述したように、表現は、その子の思考の跡でもある。子供一人一人がどう表現しているのか、また表現したことを互いに交流しさらに表現を加えていくといった活動を通して、教師は一人一人の表現を記録し、蓄積して、その子の変容を見取っていくことが大切なことではないだろうか。

こうした表現の重層化を図るためには、思考操作を積極的に取り入れていくことが大切になる。

思考操作の重層化の過程としては、次のような過程が考えられる。

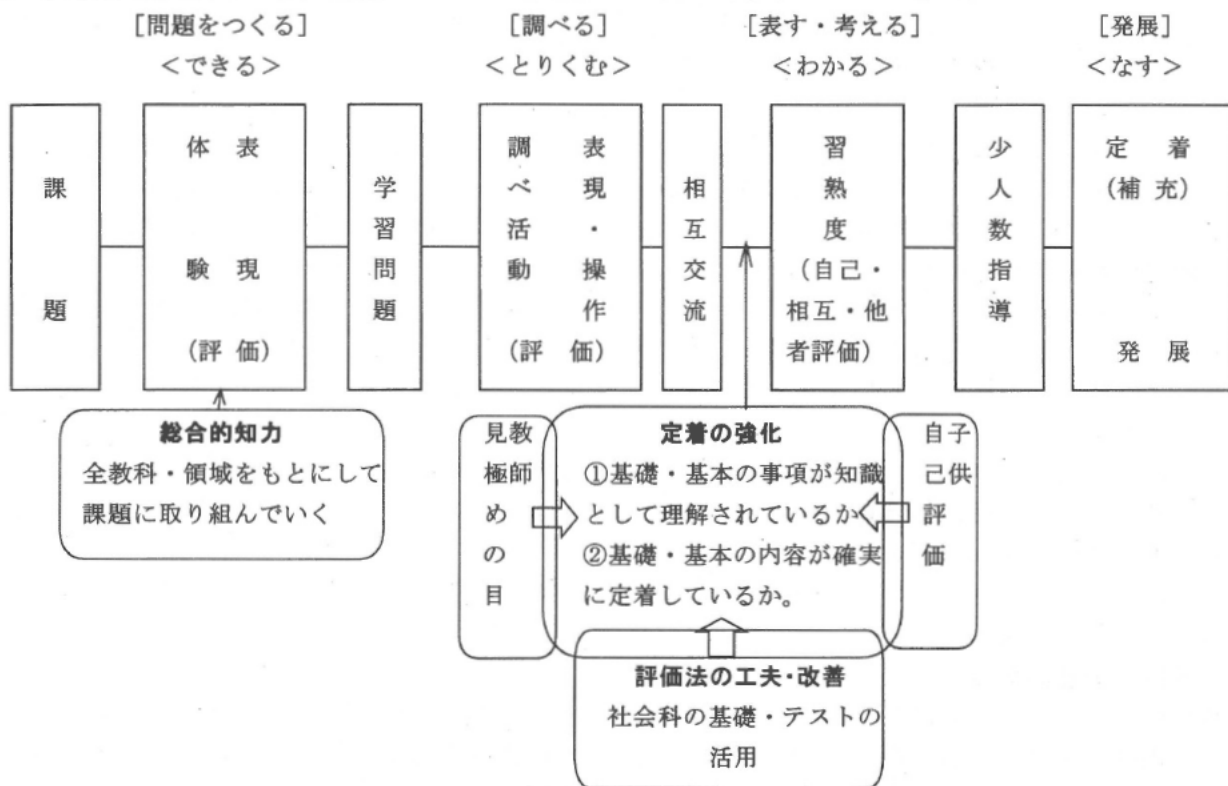
まず、それまでにためてきた課題解決にあたっての情報や自分の気づき、友だちとの交流の跡などを記した表現物（ポートフォリオ）の中から、操作をする学習材を選び出す。そして、1単位時間の授業の中で学習材を一度操作をしたら終わるのでなく、修正を繰り返して、より確かな認識へと高め、操作の重層化を図っていく。

この修正された操作の跡（表現の変容）が、自分の伸びを見つめる際に大変重要となる。さらに、操作活動の状況を友だちと交流することによって、事象についてのそれぞれの見方の違いに気付くようにする過程がある。このような相互交流は、多様なものの見方を育てる上でも、友だちとともに、そのよさに学びながら伸びていこうとするためにも、大にしたい活動である。

こうした表現と思考操作の繰り返しを経て、子供自身も自らの伸びに気づき、さらに伸ばしていこうとする意欲をもったり、また自分の弱さにも気づき、それを改善していこうとするなどの自己評価力を高め、次の学習の目標値を決定する際の大切な観点にもつながってくる。

(4) 学習指導過程の工夫・改善

～「できる」から「分かる」そして「なす」過程～



「できる」から「分かる」そして「なす」過程

まず、基礎・基本の確実な「定着」を図るために、学習指導過程を工夫することを挙げたい。

「自分の体を使った（できる）」ことから課題を設定し、表現・思考の連続を経て、基礎・基本を確実に身に付ける「学び（分かる）」ことにつなぐ過程を大切にする。自分が疑問に思ったこと、楽しかったことなど感じたことを次の学習活動につないでいくのである。

そして「できる」から「分かる」という学習過程の中で「基礎・基本の内容」の定着を図っていく。その上で「なす」過程において、習熟の状況などを見ながら「基礎・基本の定着」が図られている子供には、課題選択や課題設定などによって地域や家庭へ学びを広げ、深めていく発展的な学習の場を保障する。しかし、「基礎・基本の定着」が不十分な子供には、その時間の中でつまづきの解消を図る場（補充的な学習）を設定したり、単元のいくつかのしめくりに時間をとって行う「補充的な学習」や放課後を利用した「補充的な学習」などを行ったりすることが考えられる。

4 社会科学習の日常化に向けて

(1) 教材化・学習材化の工夫

学習指導要領の内容の精選は、全国を対象とした内容の基準としてそれを示したものであり、教育現場での教材の精選を示すものではない。

地域にある学校では、学校自ら教材の精選を行い、学校の実態に即した教育計画の作成する力が一層求められている時代である。

① 教材化

社会的事象は、相互に有機的に関連していて、自然科学のように真理が必ずしも一つに帰結しないことから、総合的に追究したり、多面的に考察することが社会科の特性である。だからこそ、問いと答えの間、原因と結果の間を大切に、問題解決的な学習を重視することが大切にされてきた。

しかし、基礎・基本の重視は、一歩間違えると羅列的知識の暗記学習へ陥る危険性がある。「いつ、どこで、何を、どうした」といった単なる事実認識の学習に陥ってしまい、それが事実であるだけに一般に答えが一つに帰結し、事実認識の学習とその成果をとらえるテストだけに陥りがちになる。

この典型的な学習が、単なるドリル学習であろう。

これを防ぐためにも、具体的に基礎・基本を抽出し、その構造化を図ることが大切である。その構造化のためにも、教材研究がより重要になってくる。

特に、歴史学習では、その時代のイメージを明確にするためには、その時代を構成している歴史的事象を吟味しなければならない。どの教材がふさわしいかを吟味するためにも、教師一人一人の教材研究する力が求められる。その吟味された諸事象の組み合わせによってその時代のイメージが確かになったとき、目標、内容、方法の一元化がなされ学習の見通しが明確になるのである。

② 教材化から学習材化へ

一人一人の子供にとって充実した社会科学学習を創るためには、教師自身が地域観察、現地調査等によって基礎・基本の定着につながるような社会事象を見つけることから始まる。そして、それをどのように社会科授業に具現化するか、それが教材化の道筋であるが、そこが教師の力量の発揮する場でもある。

ただ日常的な社会科学学習における教材は、教科書教材・資料集の資料等の活用によるものが大きい。それ以外の価値ある多様な教材をもってきて、これらの教材とどう組み合わせ、その子なりの考え方の道筋を創るかが大切なポイントになる。

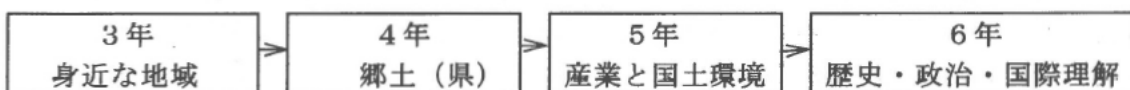
この組み合わせ方、それこそが学習材化であるが、そこから、その子ならではの基礎・基本の定着が図られるのである。

③ 教師の力量の発揮

教材化は、一人一人の教師の力量にかかわるものであることはいうまでもない。教科書やそれに基づく指導計画は、一般に教育内容の精選に基づいて行われたものであるだけに、そこに示された授業を行うことにはなんら問題はない。しかし、それだけで学習が成立しているかどうかという保障はない。よい授業が行われるということは、教科書等に示された内容をいかに教材として活性化できるか、また教材をどのように一人一人の学びに合った学習材につくりかえていくかにかかっている。その点から、より質の高い社会科学学習を実践するための教師の資質向上のための教材研究にかかわる研修も大切にしていきたい。

(2) 学年に応じた教材化・学習材化

おおまかにいうと、各学年の社会科学学習の主たる内容は以下の図の通りであるが、そこにいくつかの実践上の課題がある。



① 中学年における課題

従来、中学年の身近な地域、郷土の学習については全国各地で「〇〇プラン」「〇〇方式」等といった地域学習プランが作成され、それぞれの学校に応じた独自のカリキュラムによる社会科学学習が展開され、成果としてあらわれてきた。

一方、各学校で使用している教科書においては、他地域の事例による学習がなされている。昨今の学力低下に対する論議から、基礎・基本の確実な定着のための学習指導の改善に結びつけるための共通基準として、教科書教材の内容分析が求められている。

つまり、社会科学学習の日常化を進める上から、教科書を分析して得られた基礎・基本の事項・内容を、地域教材にどう応用・発展させていくかについて考えておくことは避けては通れない問題である。

② 高学年における課題

高学年においても、地図、年表、統計などの各種の基礎的資料を効果的に活用し、調べたことを表現することが大切なねらいの一つとなっている。多面的に社会事象をみて、社会的な思考・判断をするためには、多様な教材が必須なものである。

社会科学学習の日常化を進める上から、教科書に記載されている統計資料等を活用することはもち

ろん必要なことであるが、それ以外の資料も活用しながら、社会科学学習のどこで、どのように組み合わせ、そこからどのような考えを創り出すことができるのかといった資料活用の問題がある。

(3) 社会科ノートの充実・活用

日々の社会科学学習の中で、社会科ノートの活用はどのように図られているのだろうか。社会事象を正しくとらえ、そこから自己表現ができ、しかも友達と共に学びながら自分なりの基礎・基本の確実な定着がなされつつ、1単元あるいは1単位時間を振り返っての自己評価ができるようなノート指導が日々の社会科学学習の中で行われているだろうか。

従来からのノート指導が、そのほとんどが教師が板書したことをただ写し、記録するだけのものとなっていないだろうか。社会科学学習の日常化を進める観点から、まず社会科ノートの活用法を工夫しなければならないと考える。

従来まで、社会科ノートの活用としては、

- 分かったことがらを書く
 - 学習問題、学習のめあて、予想、まとめ、振り返りを書く
 - 図書や各種資料、友達などから得た情報を記録し、必要に応じて学習資料として活用する。
- 等については、実践されてきた。

しかし、真に「調べて、考える社会科」にするためには、一人一人のノートに体験等を通して調べ、考えた軌跡があり、またそこには基礎・基本の事項でもある社会科の用語等が表現されているノートづくりが求められている。

板書をただ写すだけのものではなく、子供たちの考えをどのように引き出し、それを互いに交流し、一人一人の思考を深めるための手だてとしてのノート指導の工夫・改善が求められている。

まさに自分の思考を整理し、客観化し、表現できるためのノートの活用である。

また、学校週5日制のもと、学校だけのノートではなく、家庭、地域にでかけての体験をノートに記録し、その活用等、学校と家庭・地域を結ぶノート活用の工夫等が求められている。

① 社会科ノートの条件

そこで、充実した社会科ノートの条件として、次の点を挙げたい。

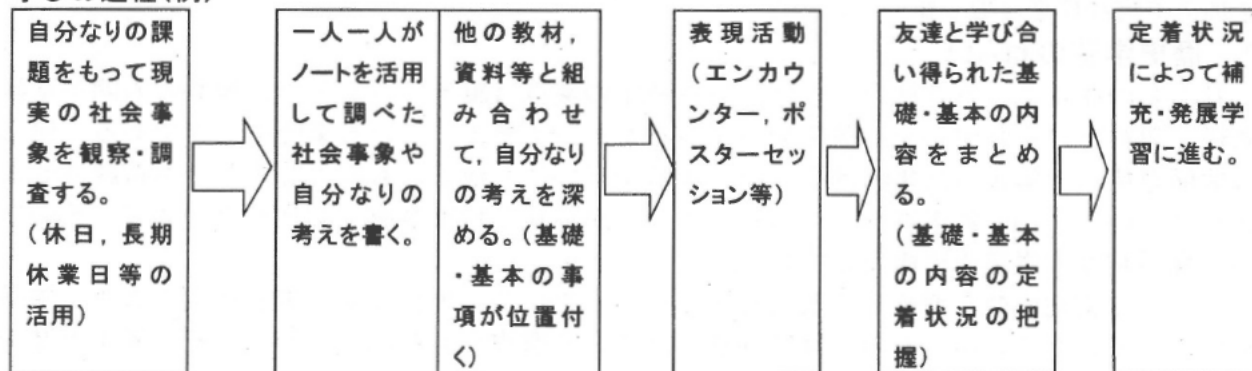
- ただ転記しただけでは意味がない。
- 基礎・基本の事項が表現されている。
- 一人一人が思考したあとや、友達との学び合い等の軌跡がある。
- 基礎・基本の内容がある。

等が考えられる。

こうした点から考えても、まさに社会科ノートの研究は社会科の本質につながる問題でもある。

② 社会科ノートづくりの過程

学びの過程(例)



「できる(体験)」 → 「分かるⅠ」 → 「分かるⅡ」 → 「習熟度評価」 → 「補充・発展」

(4) 社会科の基礎の活用

これまでも日々の社会科授業では、形成的評価とはいえないまでも、それに近い評価基準をもった意図のもとで机間巡視をし、ノート指導をしながら学習活動の軌道修正を行ってきた。しかし、その評価規準は教師の経験や勘にたよったものになっていなかったらうか。

また、従来までの形成的評価の研究においては、単元末に実施される形成的評価が主であり、それによって補充・深化を図るという学習が展開されてきていた。しかし、授業の中での形成的評価や学期・学年レベルでの形成的評価の考え方は弱かったのではないらうか。

今日、形成的評価が重視されている中で、その評価基準も授業設計の中に明確に位置付けられる必要がある。そのためにも「社会科の基礎」を活用し、形成的評価をどのように実践していくかを考えたい。そして、それによって得られた一人一人の学習到達状況に応じた補充・深化を図る学習が展開できるようにしたいのである。また、「基礎・基本の事項」では主に知識・理解の観点から、「基礎・基本の内容」では主に思考・判断の観点から到達目標を設定するが、形成的評価においては、個人の中での評価だけでなく、相対評価を加味した評価が特に求められている。その手だての一つとして、毎学期ごとの総括的評価の一つの方法として、各学年において「社会科のテスト」を実施している。これは、興味・関心、思考・判断、技能・表現、知識・理解という4つの観点別評価に基づいた学習内容の定着度を測る評価（絶対評価）というねらいだけでなく、そこには全県における相対評価を加味できるというよさをもっている。

「社会科の基礎」「社会科のテスト」を社会科学学習の中にどのように位置付けて実践できるかについて研究実践を進めていきたい。

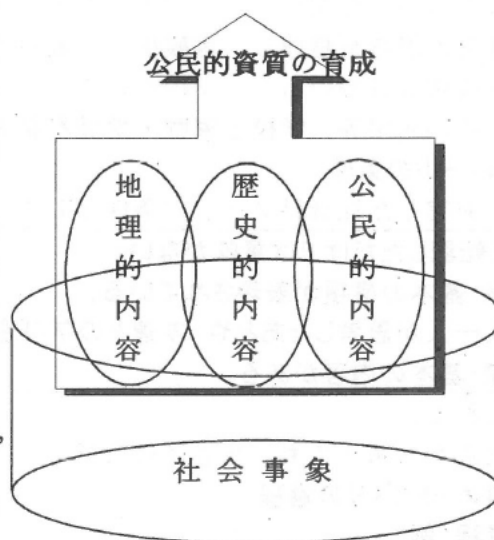
V 歴史学習について

今年度は、歴史的内容についての研究を進めていきたい。

その主な理由としては、右図のように21世紀に生きる人間づくりの教育のための大切な内容として、社会科で扱う社会事象には、常に地理的内容、歴史的内容、公民的内容が融合し合って存在している。ただ、これまでの社会科学学習では、その内容分析が不明確で、一体この時間に何を学ぶべきなのかが分かりにくかった点が挙げられる。

そこで、昨年度から地理的学習から研究を進め、内容を明確にしていくこととしてきた。

引き続いて、地理的内容とともに、歴史的内容を加えて実践研究に取り組んでいくこととした。



1 歴史学習のねらい

私たちの住んでいる「社会」とは、ある特定の環境（風土）のもとで、複数の人間が地縁や血縁、契約といった何らかの関係やつながりをもって集まっている集団のことである。何らかの関係を持って集まった集団はそういう状態を互いに心地よいものにし、しかも持続させようとして、いくつかの約束事をつくる。そうして作られた約束事を「文化」というが、その文化の中身が制度や規範や法律などである。

こうして文化の数を増やして改良を加えつつ、世代から世代に受け継ぎ社会を大きく強固なものにしてきたことが、その土地に継承されている歴史でもある。だからこそ、風土と歴史は絡み合って存在している所以でもある。

とすると、歴史上の人物の生き様を通して、世の中をよりよいものに発展させようとする人間の営みとしての文化の流れを押さえることが、歴史学習における基礎・基本となるであろう。

こうした歴史観に立って、歴史学習を展開していくことがその時代に生きた人物を通して確かな人間観を育てる上で大切になってくる。

そこで、歴史学習の本質を次のように定義したい。

単に歴史的事象について学ぶ学習でなく、歴史的事象とその事象を生み出した周りの環境(風土)との関係性から人間の生き方を学ぶこと。

では、まず風土について考察しておくこととする。

2 風土とは

私たちの生活の様々な手段である着物、家などは、その風土とかかわることなく作り出されたものではない。その土地、土地に合った生活様式を形づくっていることは周知の通りである。生活様式とは、風土において我々自身を見、その自己了解において形成したスタイルでもある。

例えば、家は寒さを防ぐ道具であるとともに、暑さを防ぐ道具でもある。それぞれの地域において寒暑のいずれかがより多くの防御を必要とするかによってまず家のづくりが規定されてくる。

南西諸島の屋根に代表されるように、屋根の重みは地震に対して不利であっても、台風等の暴風に対しては有効である。また日本家屋のような木造の家は、高温多湿の季節に対処するための生活の知恵でもある。

こうして考えれば、家をつくる仕方は、風土における人間の自己了解の表現であるともいえる。

こうした風土としての現象は、単に家や衣服だけでなく、文芸、宗教、風習等あらゆる人間生活の表現のうちに見いだすことができる。

また、人間は、個人・社会という二重の性格をもち、その自己了解の仕方の変遷は、その人や社会にとっての固有の歴史でもある。

従って歴史と離れた風土もなければ風土と離れた歴史もない。

人間は、それぞれの地域において様々な結びつきや共同体をつくる。そこには、空間と時間が存在する。人間の空間的・時間的構造(内容知)が明らかにされるとき、人間の連帯性(人間知)の構造もまた明らかにされるものである。

歴史は、こうして形成されていく。つまり、歴史は、単なる物理的時間経過ではなく、人間とのかかわりの中で存在するものである。自分に関係のない時間は時間ではない。時間は、人間の置かれた環境に応じてそれぞれ異なった長さで感受される。

「私の時間は私にしか存在しない」のである。

このことは、歴史は、世界中どこでも妥当とされる普遍的な法則ではないことを意味する。むしろ民族、その土地に住む人々によってそれぞれ異なるのが当然なのである。国や地域の数だけ歴史があっても不思議ではないのである。なぜなら、歴史は、きわめて人間的な解釈の成果だからである。それが歴史観につながる。

人間は単に一般的過去を背負うのではなく、特殊な風土的過去を背負うのである。歴史は風土的歴史であり、風土は歴史的風土であるといえる。

子供たちが、自分なりの個性的な歴史認識を富まし、確かなものとするためにも、風土と結びつけた歴史認識の形成を図っていききたい。

歴史的内容領域の学習であっても歴史的な素材を使って学ぶのであるから、歴史的な見方・考え方の育成は必要であるが、唯物史観や教訓主義といった史観レベルでの見方・考え方をいうのではないことに留意する必要がある。

いろいろな立場からの歴史観があるが、それらにまどわされることなく、人物と文化遺産からその時代に生きた人物が生きた風土と関係付けて学び、時代の景観をもたせることを大切にしたい。

3 歴史学と歴史教育

私たちが、歴史について考えるときには、発展とか目的という意識が強すぎるのではないだろうか。我が国土においても、1万年以上にも及ぶ厚い歴史の背景から考えると、常に人間と自然とが一体となって混在している世界の中で生きてきたことに気付く。身の回りの自然は、たびたび擬人化され、物理現象としての自然現象の中にも、生き物の生命と同じ様相をつくりあげてきた。

つまり、発展という前に、常に風土と一体となった歴史が展開されてきていたことを確認したい。

このような歴史の中で、目に見えないものをみようとする、あるいは記されていることの背後を知ろうとする態度がなければ歴史は語れないのではないだろうか。歴史史料、文献記録に書かれていることを受け入れ、文献史学を大切にしてきたことが歴史学であり、そこに歴史の客観性を大切にしてきた。確かに歴史は、あくまで言葉によって語られ、文字によって記されて初めて成立する世界である。しかし同時に、歴史は絶えず新しく創造される人間の知恵の凝縮したものでもある。

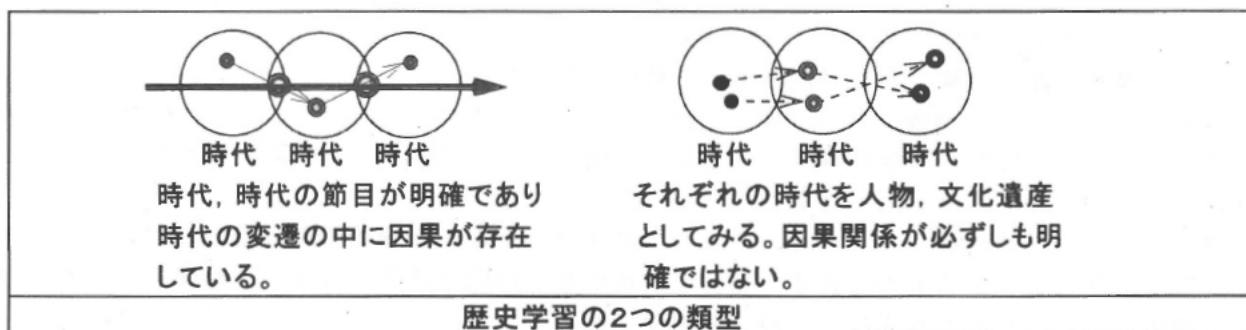
歴史は、今日を生きる私たちの意識や生活と切り離されたところに存在するものではない。歴史に根拠となりうるものは、古代から保存されているいっさいのものであろう。土器や木簡、破片、古文書等といったすべてのものが史料となり、その史料から、解釈と叙述がなされてはじめて歴史として結実するのである。

昔の人々の風俗や慣習にかかわる社会事象の叙述をしようとすれば、少しでも当時の状況に即する形で想像力を働かせなければならない。歴史学のみにとらわれてはいけない。そこが、歴史学と歴史教育との違いであろう。地理学、民俗学、言語学等の科学の学問を総合的に働かせて歴史を想像するのである。

4 学習指導要領の分析

小学校での歴史学習は、一体何を求めてきたのだろうか。

よく小学校の歴史学習は、串団子方式といわれている。



学習指導要領における第6学年目標には「国家・社会の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産について興味・関心と理解を深めるようにするとともに、我が国の歴史や伝統を大切に、国を愛する心情を育てるようにする。」とある。

国家・社会の形成者として、その発展に尽くそうとする態度や能力を育てるという教科のねらいのもと、このような態度がどのようにして育てられるかということが不明確なままであれば、そのねらいを実現することは困難である。

歴史学習は、国家・社会の発展に貢献した先人の業績や優れた文化遺産を学ぶことであるが、その際にはそれぞれの時代背景（歴史的背景）と結びつけて学び取ることが大切ではないだろうか。

つまり、我が国の歴史は、大和朝廷による国土の統一が行われてから、政治の中心地や世の中の様子などによっていくつかの時期に分けられていることや、その人物の願いや歴史上に果たした役割などについて理解できるようにすることである。というのは、その人物・文化遺産を時代に位置付けてとらえていくことによって、それぞれの時代の世の中の変化の中で継承され、発展していったことに気付くことができるからである。

このことが歴史や伝統を大切にしようとする態度に結びつくのであり、大切にすることとは、その時代の人々のもつ意味とは異なる形ではあるが、受け継がれてきたものを引き継いでいくことを考えていくことでもある。このことは、変化への認識の上に、先人の業績や文化遺産を位置付けてとらえることにつながる。

第二は、先人の業績や文化遺産が、いつの時代にも国としてのまとまりの過程で積み上げられ、つくられてきたものであることをとらえることである。自分たちの生活の歴史的背景に関心をもつとは、具体的な姿で残っているものを取り上げ、現在から歴史への問いかけをすることを意図している。昔のものが残されている意味について考えることである。

5 自分の生き方としての歴史観をつくる

歴史をとらえて、それを説明しようとする時、どんな歴史的事象を選択し説明するかは個人の判断に任されている。無数の歴史的事実の中から、一つの視点・立場に立って、事象を取捨選択し、時代や事象の関係や意味を考え、全体像を再構成することが歴史を認識することであろう。

こうした視点や立場を「歴史観」という。その意味から、人は誰しも意識するしないにかかわらず、一定の歴史観をもっている。子供は子供なりに自分の歴史観をもっているが、多くは常識的で断片的なものであろう。歴史学習とは、子供のもっている常識的な歴史観を揺さぶり、より科学的で豊かな歴史観を子供自身によって発展させていくことができるように援助するための意図的な営みといえるだろう。

歴史観とは、本来各個人が歴史をどのようにみるかという特定のものに限定することはできず、人生観というそれぞれ人によって異なった内容を意味してしかるべきである。

例えば、日本の戦前の歴史教育に見られた皇国史観、特に世界史教育においてヨーロッパ中心史観を克服して世界諸民族の歴史と文化を重視しようとする主張、あるいは人間は便利さを求めて科学技術を進歩させてきたという便利史観、歴史を進歩発展とみる歴史観、また未来を暗い悲観的なものとして見る末法思想のような終末史観、自国の行き先をある理想的な国の現状に求めるという史観を比喩的にあこがれ史観などという主義主張を子供たちに押しつけることはできない。

6 小学校歴史学習の特質

(1) 人間に対する見方(人間観)を育てる

歴史認識には、歴史という人間社会そのものに関する事象を学習者自らが認識の対象にすること、歴史という直接には経験できない間接的な認識であること、その価値判断、解釈などを通して認識が成立するという特質がある。

社会科の中で学ぶ歴史が、ある時代のある人物にだけ通用する認識(知識)としてではなく、ある時代のある人物の行動を通して学んだことが、現代の生活の中に通用するものとしてとらえられなければならない。つまり人間の行動の根底にある一般命題をベースにしてそれをもとに歴史的事象に対する科学的・社会的認識が子供たちに形成されることが大切である。

人間の行動を一般化する方法として、ある人物の行動の歴史的事象の因果関係に対して、異なる人物の同様な局面における行動に適用させたり、また学習者自身の生活経験からの判断とつきあわせることによって人間とは、こういう存在であるという自分なりの人間に対する見方、すなわち人間観が育つものと考えられる。

(2) 基礎・基本の内容

基礎・基本の内容を考えるときには、単なる羅列的な知識ではなく、構造に基づいた知識の獲得という視点が重要である。例えば、歴史学習において、教科書に書かれている年代や人名、地名、さらには作品名などの事項を学習させていくと、これらのことを暗記することに追われて、問題意識や価値観を育てるところか、時代を知ることもしない状況にあるのではないかという反省がある。

鎌倉・室町時代というのは、頼朝の幕府開設から始まり、北条市の執権政治、承久の変、元寇、徳政令、建武の新政、守護大名、応仁の乱などあらゆる分野で事項が次々出てきて複雑で混乱することが多い。しかし、この時代を「公家と武家が土地を巡って対立し、農民を二重支配していたのが、だんだん武家の力が強まり、ついに権力を独占する」ととらえるなら、政治・経済・文化の雑多な知識が整理できるだけでなく、新しい事項が出てきても、この構造の中に位置づけられる。

また、歴史的事象を、その事象が起きた環境(風土)の中でとらえることが、真に歴史を身近に感じ、日本の国土や歴史を尊重する態度の育成につながるものである。

鎌倉に幕府が開かれた理由を、鎌倉という土地の地形との関連でみることや、その当時の勢力関係と全国的な位置関係のなかでとらえること、さらには、頼朝という人物の生き様等という点から、多面的にとらえられるようにすることが大切である。

(3) 主体的な学習

これまでの歴史的学习では、子供は歴史をどのように認識すべきか、歴史をどのように学習すべきかという歴史の論理が重視されてきた。その結果として、子供の認識の過程や思考の筋道はあまり考慮されず、歴史を分からせる伝達・注入型 of 学習が一般的になった。

自己学習力を育成するためには、小学校歴史学習において伝える学習から引き出す学習へ、分かる学習からできる（分かり方が分かる）学習へ、知識・理解中心から技能・能力中心へというような学習観の転換を図ることが必要である。そのためには、子供の自主的・自発的な学習活動を重視した学習の主体性を保証する学習が不可欠になる。そのためにも、歴史ノートの在り方についての研究が求められてくる。

VI おわりに

以上の点から、今年度の研究内容について述べてきたが、昨年度の地理的な学習を基盤に据えて、今年度の歴史学習について研究実践を進めていきたい。その研究内容に「風土」についての考え方を取り入れ、新しい歴史学習の在り方等について各郡市間の実践交流を深めつつ、研修活動を重ねていきたいと考える。

平成17年度 郡市社研役員名簿

【高松市社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 先	学 校 住 所	電 話
会 長	植松 勝	校長	松 島 小	高・松島町2-14-5	087-861-4503
副会長	関根 建一	校長	四番丁小	高・番町1-5-1	087-851-8390
	徳田 仁司	校長	男 木 小	高・男木町165	087-873-0506
	古沢 博美	校長	仏生山小	高・仏生山町甲2461	087-889-0549
	高橋 英武	校長	屋島西小	高・屋島西町2469	087-841-1063
庶 務	稲田 耕一	教諭	木 太 小	高・木太町3480-1	087-861-6337
	葛西 秀樹	教諭	檀 紙 小	高・御厩町816	087-885-1715
	安倍 幸則	教諭	松 島 小	高・松島町2-14-5	087-861-4503
研究部	市原 茂幹	教諭	亀 阜 小	高・亀岡町10-1	087-861-2013
	塹原 一宏	教諭	二番丁小	高・錦町2-14-1	087-851-3741
	白川 由美	教諭	木太南小	高・木太町1530-1	087-866-7295

【丸亀市社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 先	学 校 住 所	電 話
会 長	松下 繁美	校長	富 熊 小	丸・綾歌町富熊1227	0877-86-2010
副会長	田井 敏之	教頭	城 東 小	丸・土器町西5丁目113	0877-24-4703
庶 務	寒川 英樹	教諭	城 坤 小	丸・今津町348	0877-24-4705
会 計	吉田 良三	教諭	城 坤 小	丸・今津町348	〃
研究部	梅谷 旬	教諭	城 東 小	丸・土器町西5丁目113	0877-24-4703
	大西 直人	教諭	城 辰 小	丸・川西町北151	0877-28-7401
	尾畠 良子	教諭	城 坤 小	丸・今津町348	0877-24-4705

【坂出市社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 先	学 校 住 所	電 話
会 長	野村 一夫	校長	林 田 小	坂・林田町2191	0877-47-0270
副会長	山地 正子	教頭	王 越 小	坂・王越町木沢211	0877-42-0104
	亀井 彰	教頭	松 山 小	坂・高屋町1050	0877-47-0606
	佐藤 孝治	教頭	中 央 小	坂・寿町3-1-2	0877-46-2124
庶 務	大西 浩史	教諭	川 津 小	坂・川津町3093-1	0877-46-3884
	白川 豊浩	教諭	中 央 小	坂・寿町3-1-2	0877-46-2124
研究部	福家 寿夫	教諭	東 部 小	坂・室町1-1-21	0877-46-0234
	丸岡小百合	教諭	川 津 小	坂・川津町3093-1	0877-46-3884

【小豆郡社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 先	学 校 住 所	電 話
会 長	佐藤 正文	校長	四 海 小	小・土庄町伊喜末381	0879-64-5051
副会長	真砂 高昭	教頭	北 浦 小	小・土庄町見目甲1587	0879-65-2021
庶 務	役重 和雅	教諭	安 田 小	小・内海町安田甲472-1	0879-82-2012
会 計	役重 和雅	教諭	安 田 小	小・内海町安田甲472-1	0879-82-2012
研究部	樋本 清和	教諭	渕 崎 小	小・土庄町渕崎甲1256	0879-62-0072
	林 宗利	教諭	安 田 小	小・内海町安田甲472-1	0879-82-2012
	港 貴康	教諭	池 田 小	小・池田町池田1760	0879-75-2222

【さぬき・東かがわ社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 先	学 校 住 所	電 話
会 長	八木 育夫	校長	長 尾 小	さ・長尾東 901 - 1	0879 - 52 - 3181
副会長	小倉 健治	校長	小 田 小	さ・小田 1741	087 - 896 - 0066
	熊田 正美	校長	造 田 小	さ・造田是弘 688 - 1	0879 - 52 - 2141
	寺田 文久	校長	神 前 小	さ・寒川町神前 1615	0879 - 43 - 2124
	三井 重彰	校長	相 生 小	東・南野 204 - 1	0879 - 33 - 3627
庶 務	廣瀬 強	教頭	富 田 小	さ・大川町富田西 2595 - 2	0879 - 43 - 2016
	松村 和仁	教諭	津 田 小	さ・津田町津田 144	0879 - 42 - 2047
	六車 浩	教諭	三本松小	東・三本松 862 - 1	0879 - 25 - 2664
研究部	廣瀬 強	教頭	富 田 小	さ・大川町富田西 2595 - 2	0879 - 43 - 2016
	白澤 一修	教諭	相 生 小	東・南野 204 - 1	0879 - 33 - 3627
	大高 哲也	教諭	長 尾 小	さ・長尾東 901 - 1	0879 - 52 - 3181
	永坂 邦彦	教諭	長 尾 小	さ・長尾東 901 - 1	0879 - 52 - 3181

【木田郡社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 先	学 校 住 所	電 話
会 長	藤原 政志	校長	平 井 小	木・三木町平木 710 - 1	087 - 898 - 0713
副会長	陶山 真司	教頭	小 養 小	木・三木町小養 1351 - 1	087 - 899 - 1023
庶 務	森口 英樹	教諭	平 井 小	木・三木町平木 710 - 1	087 - 898 - 0713
研究部	小笠原 学	教諭	白 山 小	木・三木町下高岡 352 - 1	087 - 898 - 0257
	泉 聡	教諭	氷 上 小	木・三木町氷上 2845	087 - 898 - 0710
	徳住 利弘	教諭	牟礼北小	木・牟礼町牟礼 2900 - 1	087 - 845 - 5742
	前田 宏之	教諭	平 井 小	木・三木町平木 710 - 1	087 - 898 - 0713

【香川郡社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 先	学 校 住 所	電 話
会 長	西 康比古	校長	直 島 小	香・直島町 1600	087 - 892 - 3007
副会長	藤本 一郎	教頭	大 野 小	香・香川町大野 1045 - 1	087 - 885 - 2165
庶 務	野土 裕彦	教諭	川 東 小	香・香川町川東上 1865 - 8	087 - 879 - 2012
研究部	池田 道雄	教諭	香 南 小	香・香南町横井 1008	087 - 879 - 2269
	栗原 久美	教諭	大 野 小	香・香川町大野 1045 - 1	087 - 885 - 2165
	仁科 大成	教諭	浅 野 小	香・香川町浅野 3088	087 - 889 - 0215
	黒田 拓志	教諭	浅 野 小	香・香川町浅野 3088	087 - 889 - 0215
	小原 敏昭	教諭	浅 野 小	香・香川町浅野 3088	087 - 889 - 0215
	野土 裕彦	教諭	川 東 小	香・香川町川東上 1865 - 8	087 - 879 - 2012

【綾歌郡社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 先	学 校 住 所	電 話
会 長	山崎 敏和	校長	国分寺北部小	綾・国分寺町新居 1880	087 - 874 - 1154
副会長	平井 勉	教頭	滝 宮 小	綾・綾南町滝宮 1100	087 - 876 - 1183
	田中 直樹	教頭	国分寺南部小	綾・国分寺町福家甲 3005	087 - 874 - 1160
庶 務	有岡 俊文	教諭	滝 宮 小	綾・綾南町滝宮 1100	087 - 876 - 1183
会 計	有岡 俊文	教諭	滝 宮 小	綾・綾南町滝宮 1100	087 - 876 - 1183
研究部	藤田 順也	教諭	陶 小	綾・綾南町陶 5878	087 - 876 - 1182
	福家 光洋	教諭	昭 和 小	綾・綾南町畑田 2381	087 - 877 - 0519

【仲善社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 先	学 校 住 所	電 話
会 長	山下 清明	校長	豊 原 小	仲・多度津町南鳴 704	0877 - 32 - 2050
副会長	水卜 由文	教頭	仲南北小	仲・仲南町十郷字富田 750 - 4	0877 - 75 - 4032
庶 務	坂倉 徹	教諭	四 箇 小	仲・多度津町三井 433 - 1	0877 - 32 - 2517
	森 昭二	教諭	善・中央小	善・文京町 4 - 5 - 1	0877 - 62 - 1616
会 計	豊田 恭子	教諭	善・東部小	善・稲木町 450 - 1	0877 - 62 - 0703
研究部	佐柳 仁	教諭	琴 平 小	仲・琴平町 145 - 1	0877 - 73 - 2831
	川田 真司	教諭	仲南東小	仲・仲南町七箇 2529	0877 - 77 - 2140

【三豊社研】

役員名	氏 名	職名	勤 務 先	学 校 住 所	電 話
会 長	西谷 則一	校長	財田上小	三・財田町財田上 726	0875 - 67 - 2005
副会長	前田 高次	校長	勝 間 小	三・高瀬町下勝間 803	0875 - 72 - 5329
	各務 清	校長	観音寺南小	観・観音寺町甲 1186 - 2	0875 - 25 - 4675
庶 務	高橋 克佳	教諭	上高瀬小	三・高瀬町上高瀬 783	0875 - 72 - 5309
	萬亀 弘吉	教諭	観音寺東小	観・観音寺町甲 670 - 2	0875 - 25 - 2219
研究部	安藤 通	教諭	観音寺東小	観・観音寺町甲 670 - 2	0875 - 25 - 2219
	深川 隆	教諭	五 郷 小	三・大野原町五郷井関 311	0875 - 54 - 2803

平成17年度 研修会別名簿

【高松市社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年・分掌
社会科の基礎・テスト編集委員	① 檀 紙 小	葛 西 秀 樹	6 年
	② 松 島 小	安 倍 幸 則	4 年
	③ 太 田 小	大 橋 けい子	4 年
	④ 花 園 小	高 橋 洋 子	少人数
学習開発委員	① 亀 阜 小	市 原 茂 幹	5 年
	② 多 肥 小	蘆 原 秀 稔	障害児
	③ 川 島 小	寺 島 幹 人	6 年
	④ 前 田 小	香 西 謙 二	4 年
	⑤ 屋 島 西 小	黒 川 浩 一	5 年
	⑥ 木 太 小	稲 田 耕 一	3 年
	⑦ 弦 打 小	池 田 茂 樹	5 年
	⑧ 木 太 南 小	白 川 由 美	6 年
	⑨ 仏 生 山 小	河 田 祥 司	3 年
	⑩ 一 宮 小	久 保 範 高	4 年
指導者	① 太 田 小	池 田 孝 徳	教 頭
	② 二 番 丁 小	川 中 祥 照	教 頭

定例研修会	① 木 太 小	稲 田 耕 一	3 年
	② 檀 紙 小	葛 西 秀 樹	6 年
	③ 亀 阜 小	市 原 茂 幹	5 年
	④ 松 島 小	安 倍 幸 則	4 年
	⑤ 二 番 丁 小	樫 原 一 宏	3 年
	⑥ 太 田 小	大 橋 けい子	4 年
	⑦ 栗 林 小	高 木 恭 子	4 年
	⑧ 多 肥 小	蘆 原 秀 稔	障害児
	⑨ 三 溪 小	姫 田 朋 樹	1 年
	⑩ 木 太 南 小	白 川 由 美	6 年
社会科 情報発信	① 木 太 小	柏 徹 哉	少人数
	② 木 太 小	増 田 泰 己	6 年

教育課題 研修	① 屋 島 西 小	南 原 志 伸	3 年
	② 太 田 小	大 橋 けい子	4 年
	③ 太 田 小	金 崎 美 穂	少人数
	④ 花 園 小	高 橋 洋 子	少人数
	⑤ 三 溪 小	姫 田 朋 樹	1 年
	⑥ 檀 紙 小	蓮 本 和 博	少人数

教育課題 研修	⑦ 木 太 小	稲 田 耕 一	3 年
------------	---------	---------	-----

【丸亀市社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年・分掌
社会科の基礎・テスト 編集委員	① 城 坤 小	寒 川 英 樹	少人数
	② 飯 山 北 小	大喜多 峯 子	3 年
学習開発 委員	① 城 東 小	合 田 吉 宏	5 年
	② 城 坤 小	吉 田 良 三	6 年
	③ 城 坤 小	佐々木 美 華	5 年
	④ 本 島 小	北 分 英 樹	専 科
指導者	① 垂 水 小	旅 田 敏 弘	少人数
	② 富 熊 小	宇 山 知 昌	4 年
定例研修会	① 城 北 小	中 西 昇	障害児
	② 城 北 小	高 木 弘 信	4 年
	③ 城 南 小	山 野 正 登	少人数
	④ 城 東 小	関 伊津子	6 年
	⑤ 飯 野 小	藤 井 隆 法	3 年
社会科 情報発信	① 飯 野 小	和 田 早 苗	6 年
	② 郡 家 小	山 地 信 子	3 年

教育課題 研修	① 城 東 小	合 田 吉 宏	5 年
	② 垂 水 小	多 田 明 広	5 年
	③ 城 坤 小	寒 川 英 樹	少人数

【坂出市社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年・分掌
社会科の基礎・テスト 編集委員	① 岩 黒 小	河 野 富 男	1～2年
	② 西 部 小	岡 本 敏 英	5 年
学習開発 委員	① 東 部 小	福 家 寿 夫	5 年
	② 川 津 小	丸 岡 小百合	障害児
	③ 西 庄 小	漆 原 恵 子	6 年
	④ 林 田 小	池 内 智 哉	5 年
指導者	① 加 茂 小	野 村 亮 子	3～6年
	② 中 央 小	白 川 豊 浩	障害児
定例研修会	① 川 津 小	大 西 浩 史	4 年
	② 西 部 小	岡 本 敏 英	5 年
	③ 櫃 石 小	香 川 英 樹	5 年
	④ 東 部 小	真 鍋 長 嗣	6 年
	⑤ 林 田 小	坂 東 寛 和	4 年

社会科 情報発信	① 金 山 小	丸 尾 ルミ子	1 年
	② 府 中 小	増 井 泰 弘	5 年

教育課題 研修	① 加 茂 小	野 村 亮 子	3～6年
	② 岩 黒 小	河 野 富 男	1～2年
	③ 中 央 小	白 川 豊 浩	障害児

【小豆郡社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年・分掌
社会科の基 礎・テスト 編集委員	① 浏 崎 小	樋 本 清 和	4 年
	② 苗 羽 小	安 藤 法 夫	5 年
学習開発 委員	① 安 田 小	役 重 和 雅	教 務
	② 安 田 小	林 宗 利	1 年
	③ 池 田 小	港 貴 康	5 年
	④ 福 田 小	八 木 由香里	3 年
指導者	① 北 浦 小	真 砂 高 昭	教 頭
	② 土 庄 小	川 井 慶 太	教務・少人数
定例研修会	① 浏 崎 小	樋 本 清 和	4 年
	② 土 庄 小	川 井 慶 太	教務・少人数
	③ 北 浦 小	坂 口 幸 子	少人数

社会科 情報発信	① 星 城 小	坂 本 弘 子	3 年
	② 安 田 小	役 重 和 雅	教 務

教育課題 研修	① 小		
	② 小		

【さぬき・東かがわ市社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年・分掌
社会科の基 礎・テスト 編集委員	① 富 田 小	橋 本 義 人	5 年
	② 小 田 小	梅 本 明 宏	5 年
学習開発 委員	① 相 生 小	白 澤 一 修	3 年
	② 三 本 松 小	六 車 浩	3 年
	③ 鶴 羽 小	古 澤 哲 夫	5 年
	④ 長 尾 小	大 高 哲 也	学力・進路支援
指導者	① 富 田 小	廣 瀬 強	教 頭
	② 丹 生 小	六 車 功	教 頭
定例研修会	① 津 田 小	松 村 和 仁	6 年
	② 三 本 松 小	六 車 浩	3 年
	③ 誉 水 小	高 田 宏 隆	学力・進路支援
	④ 長 尾 小	沖 肅 二	5 年

定例研修会	⑤ 長 尾 小	永 坂 邦 彦	6 年
	⑥ 三 本 松 小	桑 島 博 人	5 年
	⑦ 長 尾 小	長 田 在 代	6 年
社会科 情報発信	① 三 本 松 小	六 車 浩	3 年
	② 中 央 小	竹 内 久 司	教 頭

教育課題 研修	① 誉 水 小	高 田 宏 隆	学力・進路支援
	② 中 央 小	竹 内 久 司	教 頭
	③ 富 田 小	橋 本 義 人	5 年
	④ 造 田 小	窪 田 史 子	6 年

【木田郡社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年・分掌
社会科の基 礎・テスト 編集委員	① 氷 上 小	間 島 大 輔	1 年
	② 平 井 小	柴 原 照 子	4 年
	③ 小		
	④ 小		
学習開発 委員	① 平 井 小	森 口 英 樹	4 年
	② 小		
	③ 小		

学習開発 委員	④ 小		
指導者	① 小 蓑 小	陶 山 真 司	教 頭
	② 小		
定例研修会	① 平 井 小	前 田 宏 之	3 年
	② 田 中 小	茂 中 京 子	4 年
	③ 小		
	④ 小		
社会科 情報発信	① 庵 治 小	白 井 ひ と み	3 年

教育課題 研修	① 小		
	② 小		

【香川郡社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年・分掌
社会科の基礎・テスト編集委員	① 香 南 小	岡 佳 代	3 年
	② 塩 江 小	萬 谷 紀 子	5 年
	③ 小		
	④ 小		
学習開発委員	① 香 南 小	東 原 恭 子	5 年
	② 川 東 小	野 土 裕 彦	5 年
	③ 小		
	④ 小		
指導者	① 大 野 小	藤 本 一 郎	教 頭
	② 小		
定例研修会	① 直 島 小	島 村 佳寿美	5 年
	② 大 野 小	岡 田 志 保	5 年
	③ 大 野 小	栗 原 久 美	4 年
	④ 小		
社会科情報発信	① 浅 野 小	小 原 敏 昭	6 年
	② 川 東 小	野 土 裕 彦	5 年

教育課題 研修	① 川 東 小	野 土 裕 彦	5 年
------------	---------	---------	-----

教育課題 研修	② 小		
------------	-----	--	--

【綾歌郡社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年・分掌
社会科の基礎・テスト 編集委員	①国分寺南部小	大 高 浩 一	5 年
	②字多津北小	鳥 居 久宮子	5 年
	③ 陶 小	平 野 希代子	2 年
学習開発 委員	①国分寺北部小	早 瀬 良 子	3 年
	②字多津北小	中 川 峰 子	4 年
	③ 陶 小	藤 田 順 也	5 年
	④ 綾 上 小	長 友 章 子	5 年
指導者	① 滝 宮 小	有 岡 俊 文	4 年
	② 滝 宮 小	小 谷 修	6 年
定例研修会	① 陶 小	藤 田 順 也	5 年
	② 昭 和 小	福 家 光 洋	4 年
	③ 綾 上 小	宮 武 克 明	6 年
	④ 滝 宮 小	有 岡 俊 文	4 年
社会科 情報発信	①国分寺北部小	高 吉 直 之	6 年
	② 綾 上 小	宮 武 克 明	6 年

教育課題 研修	① 滝 宮 小	有 岡 俊 文	4 年
	② 小		

【仲善社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年・分掌
社会科の基礎・テスト 編集委員	① 榎 井 小	渡 部 岳 史	5 年
	② 中 央 小	森 昭 二	6 年
学習開発 委員	① 筆 岡 小	荻 田 敬 子	3 年
	② 竜 川 小	四 宮 美 佐	4 年
	③ 中 央 小	岸 上 也 志	5 年
	④ 四 条 小	森 井 信 一	6 年
指導者	① 仲 南 北 小	水 卜 由 文	教 頭
	② 仲 南 西 小	金 井 宏 諾	教 頭
定例研修会	① 中 央 小	森 昭 二	6 年
	② 東 部 小	島 田 英 夫	5 年
	③ 象 郷 小	橋 塚 智 教	6 年
	④ 与 北 小	高 橋 義 徳	少人数
社会科 情報発信	① 琴 平 小	佐 柳 仁	5 年
	② 四 箇 小	坂 倉 徹	3 年

教育課題 研修	① 小		
	② 小		

【三豊社研】

	学 校 名	氏 名	担当学年・分掌
社会科の基礎・テスト 編集委員	① 観音寺東小	安 藤 通	3 年
	② 下 高 瀬 小	安 藤 雅 慶	6 年
	③ 二 ノ 宮 小	國 土 英 二	6 年
	④ 上 高 瀬 小	高 橋 克 佳	専 科
学習開発 委員	① 観音寺東小	萬 亀 弘 吉	6 年
	② 伊 吹 小	篠 原 正 議	3・4年
	③ 観音寺南小	福 岡 靖 芳	3 年
	④ 桑 山 小	秋 元 一 秀	
定例研修会	① 上 高 瀬 小	高 橋 克 佳	専 科
	② 観音寺東小	安 藤 通	3 年
	③ 観音寺東小	萬 亀 弘 吉	6 年
	④ 五 郷 小	深 川 隆	5 年
	⑤ 伊 吹 小	篠 原 正 議	3・4年
	⑥ 二 ノ 宮 小	國 土 英 二	6 年

定例研修会	⑦ 桑 山 小	秋 元 一 秀	
	⑧ 比 地 大 小	名 越 盟 人	3 年
社会科 情報発信	① 五 郷 小	深 川 隆	5 年
	② 観 音 寺 南 小	合 田 雅 気	6 年

平成 17 年度 郡市会員名簿

高松市

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学 校 電 話
1	760-0020	錦町 2-14-1	二番丁小	教 頭	川中 祥照	087-851-3741
2	〃	〃	〃	3	桧原 一宏	〃
3	760-0017	番町 1-5-1	四番丁小	校 長	関根 建一	851-8390
4	760-0006	亀岡町 10-1	亀 阜 小	5	市原 茂幹	861-2013
5	〃	〃	〃	3	大西二美予	〃
6	760-0073	栗林町 2-10-7	栗 林 小	少人数	橋本 康裕	861-3438
7	〃	〃	〃	1	三木 省二	〃
8	760-0072	花園町 2-7-7	花 園 小	少人数	高橋 洋子	831-9129
9	760-0068	松島町 2-14-5	松 島 小	校 長	植松 勝	861-4503
10	〃	〃	〃	4	安倍 幸則	〃
11	〃	〃	〃	5	斎藤 知子	〃
12	761-8071	伏石町 845-1	太 田 小	教 頭	池田 孝徳	865-4433
13	〃	〃	〃	4	大橋けい子	〃
14	760-0080	木太町 3480-1	木 太 小	教 頭	野島 悟	861-6337
15	〃	〃	〃	3	稲田 耕一	〃
16	〃	〃	〃	少人数	柏 徹哉	〃
17	〃	〃	〃	6	増田 泰己	〃
18	761-0450	三谷町 2173-1	三 溪 小	1	姫田 朋樹	889-0767
19	761-8078	仏生山町甲 2461	仏生山小	校 長	古沢 博美	889-0549
20	〃	〃	〃	教 頭	日下 哲也	〃
21	〃	〃	〃	4	森川 美香	〃
22	〃	〃	〃	3	河田 祥司	〃
23	761-8084	一宮町 672-1	一 宮 小	4	久保 範高	885-1764
24	761-8076	多肥上町 902-2	多 肥 小	障害児	蘆原 秀稔	889-0537
25	761-8042	御厩町 816	檀 紙 小	教 務	蓮本 和博	885-1715
26	〃	〃	〃	6	葛西 秀樹	〃
27	761-8032	鶴市町 374-1	弦 打 小	5	池田 茂樹	881-3523
28	〃	〃	〃	5	山階 史子	〃
29	761-8002	生島町 345	下笠居小	1	轟 秀明	881-3011
30	760-0091	男木町 165	男 木 小	校 長	徳田 仁司	873-0506
31	761-0443	川島東町 864-1	川 島 小	6	寺島 幹人	848-0050
32	〃	〃	〃	障害児	佐藤 和代	〃
33	761-0433	十川西町 366-5	十 河 小	5	濱松 春水	848-0319
34	760-0079	松縄町 807-1	中 央 小	3	向永 和資	866-2938
35	760-0080	木太町 1530-1	木太南小	6	白川 由美	866-7295

36	761-0113	屋島西町 2469	屋島西小	校 長	高橋 英武	841-1063
37	〃	〃	〃	3	南原 志伸	〃
38	〃	〃	〃	5	黒川 浩一	〃
39	〃	〃	〃	5	岡田 陽一	〃
40	760-0080	木太町 6 区 2613	木太北部小	教 頭	高尾久美子	831-4150
41	〃	〃	〃	6	大石 桂司	〃
42	760-0017	番町 5-1-55	附属高松小	6	岡本 英孝	861-7108
43	〃	〃	〃	3	寺嶋 俊秀	〃
44	〃	〃	〃	2	亀井 健男	〃
45	〃	〃	〃	3	宮脇 充広	〃
46	〃	〃	〃	1	久利 知光	〃

丸亀市

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学 校 電 話
1	763-0051	今津町 348	城 坤 小	5	佐々木美華	0877-24-4705
2	〃	〃	〃	5	尾畠 良子	〃
3	〃	〃	〃	6	吉田 良三	〃
4	〃	〃	〃	少人数	寒川 英樹	〃
5	763-0002	瓦町 95	城 北 小	4	高木 弘信	24-4700
6	〃	〃	〃	6	橋田 栄子	〃
7	〃	〃	〃	障害児	中西 昇	〃
8	763-0071	田村町 973	城 南 小	障害児	香川 浩子	24-6177
9	〃	〃	〃	少人数	山野 正登	〃
10	763-0081	土器町西五丁目 113	城 東 小	教 頭	田井 敏之	24-4703
11	〃	〃	〃	6	関 伊津子	〃
12	〃	〃	〃	障害児	梅谷 旬	〃
13	〃	〃	〃	5	合田 吉宏	〃
14	763-0091	川西町北 151	城 辰 小	専 科	大西 直人	28-7401
15	763-0223	本島町泊 18	本 島 小	専 科	北分 英樹	27-3417
16	763-0093	郡家町 790-1	郡 家 小	3	山地 信子	28-8401
17	〃	〃	〃	障害児	佐藤 真澄	〃
18	763-0086	飯野町西分 113	飯 野 小	3	藤井 隆法	22-6019
19	〃	〃	〃	6	和田 早苗	〃
20	763-0095	垂水町 1408	垂 水 小	5	多田 明広	28-7551
21	〃	〃	〃	少人数	旅田 敏弘	〃
22	763-0108	広島町小手島 2782	小手島小	2	樋口 昌樹	29-2751
23	761-2407	綾歌町富熊 1227	富 熊 小	校 長	松下 繁美	86-2010
24	〃	〃	〃	4	宇山 知昌	〃

25	761-2407	綾歌町富熊 1227	富 熊 小	5	山田 泰二	86-2010
26	〃	〃	〃	6	馬場 直明	〃
27	761-2406	綾歌町栗熊東 323	栗 熊 小	4	平井千恵美	86-2002
28	761-2402	綾歌町岡田下 217	岡 田 小	6	徳永 桂子	86-3004
29	〃	〃	〃	3	林 聖士	〃
30	762-0082	飯山町川原 1874	飯山北小	3	大喜多峯子	98-2020
31	〃	〃	〃	障害児	岡野雄太郎	〃
32	762-0084	飯山町上法軍寺 1206	飯山南小	6	出演 大資	98-2024

坂出市

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学 年	会 員 氏 名	学 校 電 話
1	762-0042	白金町 1-3-7	西 部 小	5	岡本 敏英	0877-46-2149
2	762-0043	寿町 3-1-2	中 央 小	教 頭	佐藤 孝治	46-2124
3	〃	〃	〃	障害児	白川 豊浩	〃
4	762-0007	室町 1-1-21	東 部 小	障害児	多田羅洋子	46-0234
5	〃	〃	〃	5	福家 寿夫	〃
6	〃	〃	〃	6	真鍋 長嗣	〃
7	762-0033	谷町 3-1-23	金 山 小	1	丸尾ルミ子	46-2329
8	762-0021	西庄町 524	西 庄 小	6	漆原 恵子	46-2662
9	762-0012	林田町 2191	林 田 小	校 長	野村 一夫	47-0270
10	〃	〃	〃	5	池内 智哉	〃
11	〃	〃	〃	4	坂東 寛和	〃
12	762-0023	加茂町 1099	加 茂 小	3～6	野村 亮子	48-0601
13	762-0024	府中町 1193-3	府 中 小	5	増井 泰弘	48-0610
14	762-0025	川津町 3093-1	川 津 小	4	大西 浩史	46-3884
15	〃	〃	〃	障害児	丸岡小百合	〃
16	762-0017	高屋町 1050	松 山 小	教 頭	亀井 彰	47-0606
17	762-0014	王越町木沢 211	王 越 小	教 頭	山地 正子	42-0104
18	〃	〃	〃	障害児	四十塚恵理	〃
19	762-0072	岩黒 240	岩 黒 小	1～2	河野 富男	43-0104
20	762-0073	櫃石 585-17	櫃 石 小	5	香川 英樹	43-0203

小豆郡

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学 年	会 員 氏 名	学 校 電 話
1	761-4106	土庄町甲 657-7	土 庄 小	教 務	川井 慶太	0879-62-0068
2	761-4121	土庄町湍崎甲 1256	湍 崎 小	4	樋本 清和	62-0072
3	761-4143	土庄町見目甲 1587	北 浦 小	教 頭	真砂 高昭	65-2021
4	761-4131	土庄町伊喜末 381	四 海 小	校 長	佐藤 正文	64-5051
5	761-4301	池田町池田 1760	池 田 小	5	港 貴康	75-2222
6	761-4432	内海町草壁本町 632-1	星 城 小	3	坂本 弘子	82-2011
7	761-4411	内海町安田甲 472-1	安 田 小	教 務	役重 和雅	82-2012
8	〃	〃	〃	1	林 宗利	〃
9	761-4421	内海町苗羽甲 1371-1	苗 羽 小	5	安藤 法大	82-2013

さぬき・東かがわ市

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学 年	会 員 氏 名	学 校 電 話
1	769-2903	東・南野 204-1	相 生 小	校 長	三井 重彰	0879-33-3627
2	〃	〃	〃	3	白澤 一修	〃
3	769-2601	東・三本松 862-1	三本松小	5	桑島 博人	25-2664
4	〃	〃	〃	3	六車 浩	〃
5	769-2605	東・中筋 425	誉 水 小	支 援	高田 宏隆	25-2044
6	769-2515	東・町田 126-1	丹 生 小	教 頭	六車 功	25-3504
7	761-0901	さ・大川町富田西 2595-2	富 田 小	教 頭	廣瀬 強	43-2016
8	〃	〃	〃	5	橋本 義人	〃
9	761-0904	さ・大川町田面 125	松 尾 小	校 長	竹田 具治	43-3016
10	769-2323	さ・寒川町神前 1615	神 前 小	校 長	寺田 文久	43-2124
11	769-2312	さ・造田是弘 688-1	造 田 小	校 長	熊田 正美	52-2141
12	769-2301	さ・長尾東 901-1	長 尾 小	校 長	八木 育夫	52-3181
13	〃	〃	〃	教 頭	穴吹 眞二	〃
14	〃	〃	〃	5	沖 肅二	〃
15	〃	〃	〃	支 援	大高 哲也	〃
16	〃	〃	〃	6	永坂 邦彦	〃
17	769-2101	さ・志度 727	志 度 小	校 長	徳田二三男	087-894-0041
18	〃	〃	〃	5	和田 千幸	〃
19	769-2102	さ・鴨庄 2947	中 央 小	教 頭	竹内 久司	895-1154
20	769-2103	さ・小田 1741	小 田 小	校 長	小倉 健治	896-0066
21	〃	〃	〃	5	梅本 明宏	〃
22	769-2401	さ・津田町津田 144	津 田 小	6	松村 和仁	0879-42-2047
23	769-2402	さ・津田町鶴羽 781-2	鶴 羽 小	5	古澤 哲夫	42-2041

木田郡

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学 校 電 話
1	761-0702	三木町平木 710-1	平 井 小	校 長	藤原 政志	087-898-0713
2	〃	〃	〃	5	山下 勝正	〃
3	〃	〃	〃	4	柴原 照子	〃
4	〃	〃	〃	4	森口 英樹	〃
5	〃	〃	〃	3	前田 宏之	〃
6	〃	〃	〃	3	益田 隆子	〃
7	761-0611	三木町田中 4620-2	田 中 小	4	茂中 京子	898-0501
8	761-0615	三木町小蓑 1351-1	小 蓑 小	教 頭	陶山 真司	899-1023
9	761-0612	三木町氷上 2845	氷 上 小	5	泉 聡	898-0710
10	〃	〃	〃	1	間島 大輔	〃
11	761-0704	三木町下高岡 352-1	白 山 小	6	小笠原 学	898-0257
12	761-0122	牟礼町大町 1560	牟 礼 小		高畑 和晋	845-9239
13	761-0121	牟礼町牟礼 2900-1	牟礼北小	4	徳住 利弘	845-5742
14	761-0122	牟礼町大町 1115-1	牟礼南小	4	多田恵美子	845-9324
15	761-0130	庵治町 790-1	庵 治 小	4	丸山美代子	871-2581
16	〃	〃	〃	3	白井ひとみ	〃
17	761-0130	庵治町 6034-1	庵治第二小	5・6	佐々木広子	871-5110

香川郡

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学 校 電 話
1	761-1612	塩江町安原上東 365	塩 江 小	5	萬谷 紀子	087-893-0027
2	761-1701	香川町大野 1045-1	大 野 小	教 頭	藤本 一郎	885-2165
3	〃	〃	〃	5	岡田 志保	〃
4	〃	〃	〃	4	栗原 久美	〃
5	761-1703	香川町浅野 3088	浅 野 小	6	小原 敏昭	889-0215
6	〃	〃	〃	6	仁科 大成	〃
7	〃	〃	〃	4	川村 千寿	〃
8	〃	〃	〃	3	黒田 拓志	〃
9	761-1706	香川町川東上 1865-8	川 東 小	5	野土 裕彦	879-2012
10	〃	〃	〃	4	大森 芳紀	〃
11	761-1404	香南町横井 1008	香 南 小	5	池田 道雄	879-2269
12	〃	〃	〃	5	東原 恭子	〃
13	〃	〃	〃	3	岡 佳代	〃
14	761-3110	直島町 1600	直 島 小	校 長	西 康比古	892-3007
15	〃	〃	〃	6	島村佳寿美	〃

綾歌郡

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学 校 電 話
1	761-2203	綾上町山田上甲 1494-1	綾 上 小	6	宮武 克明	087-878-2004
2	761-2101	綾南町畑田 2381	昭 和 小	4	福家 光洋	877-0519
3	761-2103	綾南町陶 5878	陶 小	2	平野希代子	876-1182
4	〃	〃	〃	5	藤田 順也	〃
5	761-2305	綾南町滝宮 1100	滝 宮 小	教 頭	平井 勉	876-1183
6	〃	〃	〃	4	有岡 俊文	〃
7	〃	〃	〃	6	小谷 修	〃
8	769-0101	国分寺町新居 1880	国分寺北部小	校 長	山崎 敏和	874-1154
9	〃	〃	〃	1	青木 弥生	〃
10	〃	〃	〃	3	早瀬 良子	〃
11	〃	〃	〃	5	西尾 由加	〃
12	〃	〃	〃	6	高吉 直之	〃
13	769-0103	国分寺町福家甲 3005	国分寺南部小	教 頭	田中 直樹	874-1160
14	〃	〃	〃	5	大高 浩一	〃
15	〃	〃	〃	6	平田 啓介	〃
16	769-0210	宇多津町 815	宇多津小	4	松浦 正彦	0877-49-1820
17	〃	〃	〃	6	勝田 健彦	〃
18	769-0208	宇多津町浜八番丁 115	宇多津北小	4	中川 峰子	49-2000
19	〃	〃	〃	5	鳥居久宮子	〃

仲多度郡・善通寺市

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学 校 電 話
1	766-0021	満濃町四條 732	四 条 小	6	森井 信一	0877-73-5514
2	766-0023	満濃町吉野 74	満濃南小	教 頭	花房 長広	79-2110
3	766-0017	満濃町炭所西 1431-2	長 炭 小	4	阿部 和子	79-2006
4	769-0303	仲南町七箇 2529	仲南東小	3	川田 真司	77-2140
5	769-0319	仲南町十郷追上下大口 20	仲南西小	教 頭	金井 宏諾	77-2310
6	769-0312	仲南町十郷宮田 750-4	仲南北小	教 頭	水卜 由文	75-4032
7	766-0002	琴平町 145-1	琴 平 小	5	佐柳 仁	73-2831
8	766-0004	琴平町榎井 58-3	榎 井 小	5	渡部 岳史	73-2494
9	766-0006	琴平町上櫛梨 26	象 郷 小	校 長	三井 尚	73-2830
10	〃	〃	〃	6	橋塚 智教	〃
11	764-0032	多度津町三井 433-1	四 箇 小	3	坂倉 徹	32-2517
12	764-0026	多度津町南鴨 704	豊 原 小	校 長	山下 清明	32-2050
13	764-0011	多度津町栄町三丁目 1-9	多度津小	6	藤田 朱美	33-1616
14	765-0013	善・文京町 4-5-1	中 央 小	教 頭	福家 親夫	62-1616
15	〃	〃	〃	5	岸上也寸志	〃

16	765-0013	善・文京町 4-5-1	中 央 小	6	森 昭二	62-1616
17	765-0004	善・善通寺町 1146	西 部 小	4	平澤 昌司	62-0701
18	765-0053	善・生野町 2990-1	南 部 小	5	藤本 博文	62-0702
19	765-0022	善・稲木町 450-1	東 部 小	5	島田 英夫	62-0703
20	〃	〃	〃	4	豊田 恭子	〃
21	765-0040	善・与北町 1238	与 北 小	支 援	高橋 義徳	62-0704
22	765-0032	善・原田町 306-1	竜 川 小	校 長	唐木 裕志	62-0705
23	765-0073	善・中村町 1575-2	筆 岡 小	3	小原富美枝	62-0706
24	〃	〃	〃	3	荻田 敬子	〃
25	765-0061	善・吉原町 2811	吉 原 小	5	高橋 裕子	62-0707

三豊郡・観音寺市

番号	郵便番号	学 校 所 在 地	学 校 名	学年	会 員 氏 名	学 校 電 話
1	769-1621	大野原町五郷井関 311	五 郷 小	教 頭	安藤 清和	0875-54-2803
2	〃	〃	〃	5	深川 隆	〃
3	768-0060	観・観音寺町甲 670-2	観音寺東小	3	安藤 通	25-2219
4	〃	〃	〃	6	萬亀 弘吉	〃
5	768-0060	観・観音寺町甲 1186-2	観音寺南小	校 長	各務 清	25-4675
6	〃	〃	〃	6	合田 雅気	〃
7	〃	〃	〃	6	木谷 厚子	〃
8	〃	〃	〃	4	近藤 久晃	〃
9	〃	〃	〃	3	福岡 靖芳	〃
10	768-0071	観・伊吹町 309	伊 吹 小	3・4	篠原 正議	29-2103
11	768-0102	山本町大野 457-1	大 野 小	校 長	田井 秀典	63-2009
12	769-0401	財田町財田上 726	財田上小	校 長	西谷 則一	67-2005
13	769-1507	豊中町岡本 188-1	桑 山 小		秋元 一秀	62-2103
14	769-1501	豊中町比地大 2514-1	比地大小	3	名越 盟人	62-2124
15	767-0021	高瀬町佐股甲 1497-1	二ノ宮小	6	國土 英二	74-6302
16	767-0001	高瀬町上高瀬 783	上高瀬小	専 科	高橋 克佳	72-5309
17	767-0011	高瀬町下勝間 803	勝 間 小	校 長	前田 高次	72-5329
18	〃	〃	〃	教 頭	久保山 学	〃
19	767-0032	三野町下高瀬 760	下高瀬小	6	安藤 雅慶	72-5401

